

スコットランドにおける言語事情と グラスゴウのゲール語教育

杉 本 豊 久

目次

0. はじめに	(83)
1. スコットランドの言語事情	(84)
1.0. 客観的事実	(84)
1.1. ゲール語	(85)
1.1.1. ゲール諸語とスコットランド・ゲール語	(85)
1.1.2. スコットランド・ゲール語の歴史と現状	(87)
1.2. スコットランド語	(91)
1.3. スコットランド英語	(94)
2. グラスゴウにおけるゲール語教育	(100)
2.1. Bunscoil Ghàidhlig Ghlaschu の歴史と近況	(100)
2.2. 教育方針とゲール語教育の意義	(103)
2.3. 生徒数とスタッフ構成	(106)
2.4. 授業の実施形態及びカリキュラムと科目	(121)
2.5. 学業成果と出席率	(130)
2.6. 卒業後：中学校への進学とゲール語教育	(138)
3. まとめ	(139)

0. はじめに

1991年の国勢調査によると、スコットランド本島において、ゲール語話者が増加傾向にある地域がローランドにあり、特にグラスゴウで顕著だという。この事実には驚くと同時に、興味を持った。ゲール語といえば、スコットランドに限らず、イングランド、ウェールズ、そしてアイルランドにおけるケルト系先住民族の言語でもある。しかし、現在ではその話者の数は年々減少の一步を辿り、スコットランド・ゲール語だけでは約6万人¹⁾ならずで、その分布も主としてスコットランド北西部の高地地方及び島嶼部に限られているはずである。

そこで、本稿では、現在ではその存在がアイルランドとグレート・ブリテン島にほぼ限られているゲール語の中で、スコットランド・ゲール語がどのような位置を占めているのか。また、ゲール語を含めてスコットランド国内の言語事情はどうなっているのか。さらに、スコットランド最大の人口を擁する大都市グラスゴーに焦点を絞り、ここでなぜゲール語教育が注目されているのか。そして最終的に、スコットランド全体のゲール語教育を踏まえつつ、グラスゴーにおけるゲール語教育の核の一つとなっている、グラスゴー・ゲーリック・スクール(Glasgow Gaelic School : *Bunsgoil Ghàidhlig Ghlaschu*)での教育の実態とその背景の一面を解明したい。

1. スコットランドの言語事情

1.0. 客観的事実

まず最初に、スコットランドに関する基本的かつ重要な客観的事実をあらかじめ整理し、確認しておく。そのうえで、スコットランドにおける3つの言語変種それぞれについての議論を進め、それぞれの位置づけとする。

(1) スコットランドは英国全土の3分の1の地域を占めるが、人口は10分の1しか占めていない。そして、そのスコットランドの人口のうち、ゲール語話者はわずか12パーセント、約6万人である。²⁾

(2) 地域的には、北部および北西部の高地地方(Highlands in the north and north-west); 首都 Edinburgh, Glasgow, Stirling などを抱える、人口の多い南部の低地地方(Lowlands in the south); それに西部諸島(Outer and Inner Hebrides を中心とした the Western Isles) および北部諸島(The Orkney Islands および The Shetland Islands を中心とした the Northern Isles) に分割できる。

(3) 民族構成的には、i) 最初のケルト系定住者であるピクト人³⁾に、5世紀頃にアイルランドから西部地域に住み着いた、Goidelic (Gaelic) language group を代表するケルト系民族「スコット人(Scots)」が加わって独立王国を作り、11世紀には北東イングランドにまで領土を広げた。ii) 7世紀に「アングロ・サクソン人(Anglo-Saxon)」(特に、Angles と呼ばれた民族)が Northumberland からス

コットランド南東部に進出・北上拡大し、徐々に西進してスコットランド南西地域に広がっていった。iii) 8～9世紀にかけて、「スカンジナビア・バイキング (Scandinavian Vikings)」（ゲルマン系）達、（特にノルウェー人 (Norwegian)）が、オークニー諸島 (The Orkney Islands) シェトランド諸島 (The Shetland Islands) およびスコットランド本土の一部 (Caithness) などを占領した。iv) 君主制の強化を期して、国土の一部を移譲したスコットランドの国王たちの招きにより、「アングロ・ノルマン系の人々 (Anglo-Normans)」（彼らの家来や召使たちは英語を話していた）が、イングランドから到来し、12世紀ごろにはすでにほぼ現在と変わらない人種構成が出来上がった。

(4) 言語地域的には、これらの歴史的背景を反映して、3つの主要言語変種：「スコットランド・ゲール語 (Scottish Gaelic)」「スコットランド語 (Scots)」、そして「スコットランド英語 (Scottish English)」があり、それぞれがさらに細かいバラエティーを持つ。

以上の客観的事実をふまえ、ゲール語、スコットランド語およびスコットランド英語についての議論を進める。

1.1. ゲール語

1.1.1. ゲール諸語とスコットランド・ゲール語

そもそも、ゲール語というのは、先も触れたように、アングロ・サクソンを主流とする北西ヨーロッパ大陸のゲルマン系民族がブリテン島に侵入する以前から、そこに居住していたケルト系民族の言語である。言語の系統からいえば、印欧語族 (Indo-European) の下位区分のひとつ、ケルト諸語 (Celtic) に属する。ところが、このケルト諸語はゴイデル語派 (Goidelic < Gaelic) とブリソン語派 (Brythonic < British) とに分かれており、スコットランドのゲール語 (Scottish Gaelic) は、アイルランドのゲール語 (またはアイルランド語 (Irish))、マン島語 (Manx) とともにゴイデル語派に属する。ちなみに、ウェールズ語 (Welsh)、コーンウォール語 (Cornish)、ブルトン語 (Breton) はブルソン語派に属する。なお、ケルト諸語を地理的に分類すると、大陸ケルト語群と島嶼ケルト語群とに分けられるのだが、前者の大陸ケルト語群に属する、ガリア語やケルト・イベリア語などはすべて4世紀ごろまでに消滅しており、問題になっているゴイデル語派もブリソン語派もとも

に島嶼ケルト語群に属する。

また、ケルト諸語を、言語学的特徴を基に分類する方法もある。スコットランドのゲール語(Scottish Gaelic)、アイルランドのゲール語(またはアイルランド語 (Irish))、マン島語 (Manx) などのゴイデル語派に属するゲール語群を q - ケルト語 (q-Celtic) と呼び、ウェールズ語 (Welsh)、コーンウォール語 (Cornish)、ブルトン語 (Breton) などのブリソン語派に属するゲール語群を p - ケルト語 (p-Celtic) と呼ぶ分類法はその一例である。この、“ q - ” と “ p - ” の区別は、ある音声の変遷過程の特徴を表して、元々印欧祖語の頃の段階で、おそらく語頭が [qu-] (のような音声) であったものが、ブリソン語派に属するゲール語群においては [p-] (のような音声) に変化し、p- と綴られるようになったとみられる。一方、ゴイデル語派に属するゲール語群では [qu-] (のような音声) のまま変化せず、最終的に c- と綴られるようになったとみられる。ちなみに、これらの音声は、ラテン語では [qu-] のままで留まったが、英語の場合には [wh-] あるいは [f-] (のような音声) へと変化し、wh- や f- のように綴られるようになった。⁴⁾

Fios Feasa⁵⁾ のホームページでは、アイルランド語 (c < q-Celtic) ・ウェールズ語 (p-Celtic) ・ラテン語 (q < q-Celtic) ・英語 (f < p < /wh < qu < q-Celtic) の語彙対照表を示してこの変遷結果をわかりやすく示している。ここでは、それに各名称と語彙選択を若干修正して表記する。

- | | | | | |
|---------------------------------------|----------|---------|------|--------|
| 1) アイルランド語 (c < q-Celtic) | ceathair | cuig | cad | cia/ce |
| 2) ウェールズ語 (p-Celtic) | pedwar | pump | peth | pwyl |
| 3) ラテン語 (q < q-Celtic) | quattuor | quinque | quod | qui |
| 4) 英語 (f < p < /wh < qu < q-Celtic) | four | five | what | who |

話がややわき道に逸れたが、スコットランド・ゲール語は、ゲール諸語の中ではゴイデル語派に属し、言語的特徴としては、アイルランド語と同じ「 q - ケルト語 (q-Celtic) 」に属することになる。ただし、一般にアイルランド語 (アイルランドのゲール語) は文字通り「ゲーリック [ge:lik]」と発音されるが、スコットランド・ゲール語は、英語でもゲール語でも「ギャーリック [gælik]」と発音され、綴りは英語では Gaelic、ゲール語では Gàidhlig である。このことに関しては、筆者がグラス

ゴー滞在中に幾たびとなくその発音を直された。公私共に大変お世話になったグラスゴー大学の英文科 (Department of English Language) の Jeremy J. Smith 教授にも指摘されたし、“Glaswegian Patter” の資料収集の際に貴重な情報を提供してくれた、行きつけのパブ *the Doublet* の友人たちにも何度か指摘された。

1.1.2. スコットランド・ゲール語の歴史と現状

スコットランドにおけるゲール語の使用は、4世紀から5世紀にかけて、ローマ帝国の衰退期に銀を求めてアイルランドからブリテン島に侵入したスコット人 (Scots) の入植に始まるとされる。しかし、実はそれよりも前からスコットランドに居住していたケルト系の民族、ピクト人 (Picts) も、ブリトン語やゴール語と同じケルト系の言語を話していた可能性が高い。

ピクト人は、エディンバラの北のフォース湾から、はるか北端の地、シェトランド諸島の北端、アンスト島にまで及ぶ広い地域に居住していたとされる。しかし、その政治や社会のしくみは不明であり、残っているのは地名と石に刻まれた記録だけである。石には謎めいた模様や戦いと狩りの絵が描かれていて、当時の人々の身なりや装飾品などが伝えられる程度である。したがって、現在のスコットランド人の祖先を辿るのであれば、おそらくピクト人に行き着くことになる。しかし、そのピクト人はアイルランドの対岸にあたるスコットランドの西海岸地域、当時アーガイル (Argyll) と呼ばれていた地域から、アイルランドから入植したスコット人によって追い出され、アルバ王国へと統合されていく。スコット人たちはアイルランドから入植したのだから、アイルランドとスコットランドのゲール語はほぼ同じ起源を持つと考えられているが、それ以前のピクト人の言語との関係がいまひとつ情報不足で不明確ではある。

それはともかく、10世紀までにはスコットランドでは大部分の人々がこの「スコットランド・ゲール語 (Scottish-Gaelic) を話すようになっていたが、11世紀になると、例の1066年のノルマン人のイングランド征服を契機として、Norman French を話す宮廷や貴族たちの間では、次第にゲール語はその優位性を失っていく。一方、東部および中央スコットランド地域の大部分では、「スコットランド語 (Scots)」(後述) にそ

の地位を奪われてしまい、17世紀までには、Gaelicは高地地域（the Highlands）とヘブリディーズ諸島（the Hebrides）に追いやられてしまう。そして、17世紀以降のゲール語の衰退のプロセスを語るには、そのプロセスに直接的に関わる一連の歴史的イベント、具体的には、1603年の同君連合に始まり、1688年の名誉革命、1707年の議会合同、およびその結果として起こったともいえる1745 - 46年のジャコバイトの乱、を念頭に置かねばならない。高橋(2004: 68 - 9, 87)は、その過程を極めて要領よく、かつ的確にまとめておられるので、ここに引用する。

「1707年のスコットランドとイングランドの両議会の合同（Union of 1707）本書では「合邦」とつづるめるは現代のこの国のアイデンティティを作り上げるうえで決定的な意味を持つ事件である。

この出来事の意味を的確に知るためには、それに先立つ百年間の同君連合の時代とその終わり近くに起こった名誉革命、さらには合邦の直接の結果である四十年後のジャコバイトの乱をひっくるめて一続きの、あるまとまった過程として理解することが必要である。」(68頁)

「1603年、イングランドのエリザベス女王が継嗣のないまま亡くなったため、父母両系からの王統によってスコットランド王ジェームズ六世がイングランド王を兼ね、ジェームズ一世となる。母メアリの果たせなかった夢をかなえたわけだ。これが同君連合（Union of the Crowns）で、ジェームズと彼の宮廷はロンドンに移り住み、二十年も里帰りしなかった。宮廷費も潤沢となり、叛服常なき大貴族たちに悩まされることもなく、居心地はよかったようで、それもあつてか積極的に両国の同化政策を推進する。

とくに重要なのは言語上の同化で、ハイランドを中心としたゲール語圏はこの時代に縮小の一步を大きく踏み出す。ジェームズがそれを野蛮の温床とみなし、英語ができないと学校教育も受けられなくしたからで、同時に彼はみずから先頭に立って聖書の英訳事業を進めた。欽定訳聖書（1611）はその成果で、長期的には英語世界の拡大に計りしれぬ役割を果たす。ロウランドでは英語の方言に当たるスコットランド語が主に使われていたが、英語の普及も次第に進

み、のちに詩人のエドウィン・ミュアが「スコットランド人はスコットランド語で感じ、英語で考える」と述べたような状況の大本はこの時代にできあがった。」(68 - 9頁)

「合邦反対派のジャコバイトが幾度か兵を挙げた。「ジャコバイトの乱」である。とくに最後の1745年の反乱は、ハイランドの西端に少数の兵で上陸した亡命政権の希望の星、前にもふれたチャールズ王子の軍が次第にふくれあがってイングランド中部のダービーにまで南下し、ロンドンをうかがう気配をみせて天下を震撼させた。しかし最後は、ハイランドの外れカローデンの野で大敗を喫し、多くの戦士を失った。さらにハイランドでは広大な土地が接収され、氏族制は反乱の温床だとして解体され、武器はもちろんゲール語、バグパイプやキルトまでが禁止された。ジャコバイト運動だけでなく、ハイランドのアイデンティティそのものが失われようとしていた。」(87頁)(下線は筆者)

このように、1745年のジャコバイトの乱で高地地方の族長たちが反乱に敗北してからは、政府によって高地地方のあらゆる伝統的な文化・氏族制度が崩壊させられ、さらに追い討ちをかけるように、The Clearances 政策⁸⁾により、圧倒的多数の住民が追い出され、南部の産業都市へ、あるいは外国への移住を余儀なくされた。これによって、スコットランド島嶼部、及び高地地方のほとんどのゲール語話者のコミュニティーが破壊され、第1言語としての地位を失ってゆくことになる。つまり、15世紀後半から18世紀にかけて、スコットランドおよび英国国会によるいわば、英語教育促進を狙った政策の波状攻撃により、ゲール語の衰退はさらに促進されることとなり、書き言葉よりも話し言葉として生き残りの道を歩むことになる。(MacKinnon : 1998, 176ff)

このようにして、20世紀の中ごろまでに、ゲール語(Gaelic)は衰退の極に達していたが、1970年代の半ばになって一般市民による草の根的復興が起こり、次世代のゲール語話者を増やすことによりゲール語の復興を目指そうとの気運が高まり、子供達を対称としたゲール語教育グループ(Gaelic playgroups)やゲール語小学校(Gaelic primary schools)あるいはゲール語ユースクラブ(Gaelic Youth Clubs)などが設立され、熱心なゲール語・文化復興活動の拠点となった。また、国際的に活躍し

ているバンド(Runrig や Capercaillie)をはじめ、Feisean(Gaelic tuitional festivals) や Mods (Gaelic competitive festivals) などのフェスティバルや National Gaelic Arts Project などのイベントの開催により、さらに復興のムードが高まるとともに、2003年にスコットランド国民党(Scottish National Party)の Michael Russell がスコットランド議会に「ゲール語に関する法案(Gaelic Language Bill)」を提出し、2005年にスコットランド議会を通過し、「ゲール語法(Gaelic Language Act)」が成立した。

1991年の国勢調査によると、スコットランドのゲール語話者65,978人のうち、ゲール語を読めると答えたものは58.9%であり、書けると答えたものは44.6%であった。これが、2001年の国勢調査では、ゲール語話者が11%(約7,300人)減少している。(ただし、ゲール語を読める人の数は7.5%(約3,200人)増加し、書ける人の数は10%(約3,100人)増加している。)(注:1)および16)を参照)また、Shutherland(north-east Scotland)での言語の消失過程の研究によれば、一種の diglossic な状況が見られ、ゲール語は教会などの high domains ではまだ使われているが、家庭という重要な domain では急速にかつ意識的に使われなくなってきたという。今日では、事実上、すべてのゲール語話者は 'functionally bilingual' の状態であるという。(Nancy Dorian : 1981, 104)

ところが、西部諸島(the Western Isles)およびスコットランド本土の北西一部地域では、伝統的にゲール語使用のいわば“砦”となっていて、すでに冒頭で指摘したように、1991年の国勢調査によれば、これらの低地地域(the Lowlands)、特にグラスゴー地域ではゲール語話者の増加が見られたという。そして、1)ゲール語を用いて教育をする小学校(Gaelic-medium primary schools)が設けられたり、2)場所によっては、第2言語としてゲール語が教えられている学校も存在し、3)ゲール語によるラジオやテレビ放送番組が増加し、ゲール語によるメロドラマ(soap operas)やドキュメンタリー、コメディーなど、さまざまな分野に及んでいる。また、4)ゲール語の出版社や映画会社などもある等々、いわばゲール語維持活動(言語政策)なるものが顕著に散見される。

このような状況の中で、前述の「ゲール語法」が正式に発足し、ゲール語がスコットランドの公用語として、原則として英語と対等の扱いとなり、政府の公的機関として「ゲール語省(Bòrd na Gàidhlig)」⁹⁾が設

けられ、スコットランドにおけるゲール語使用の促進とゲール語の地位保全を将来長期にわたって保証することとなった。これにより、ここ数年やや中たるみ状態にあったゲール語の普及が、一気に軌道に乗る可能性がある。

12. スコットランド語 (Scots)

「スコットランド語 (Scots)」というのはそれ自体独自の特徴を持つ言語で英語の中に位置づけるべきではないとの意見もある。例えばインターネットで Scots tongue を検索すると、あらかじめこれは非公式ながらと断った上で¹⁰⁾ 1) Scottish Pronunciation, 2) Scottish Words, 3) Scottish Given Names, 4) Scottish Family Names, 5) Scottish Place Names と5項目にわたってその具体例が事細かに紹介されていて、スコットランドを訪れる観光客たちのちょっとしたガイドブック的な情報を提供している。もちろん、スコットランド語に関する辞書を調べればこれよりもはるかに詳細な情報が入手できるのではあるのだが、なぜスコットランドの人々はこれほどまでに、マスコミを初めとする情報ネットワークを抱き込んで、「スコットランド語」の独自性にこだわるのだろうか。¹¹⁾

考えてみれば、この「スコットランド語」といっても英国の一部であるスコットランドの言語であることにかわりなく、英語と最も関係の深い言語であり、イングランドの英語と同じ古英語 (Old English) から派生したものである。「スコットランド語 (Scots)」の「スコットランド英語 (Scottish English)」(後述)に与えた影響は明らかで、現に、両者はともに一つの言語連続体 (a linguistic continuum) を成すともいわれる (Aitken: 1984)。つまり、初期の文語による豊富な資料から、例えば、現代英語の語頭の wh- がことごとく quh- となる (*whilk quhilk*) (Meurman-Solin: 1999, 309) など独自の言語的特徴は確かにあるのだが、しかしその成長過程において常に英語の北部地域変種と接近してきたのであり、両者はお互いに意思疎通が可能 (intelligible) であったとさえいわれる (Romaine: 1982, 57) ほどに接近しており、言語接触を繰り返した結果、その言語的特徴は両者の混合体と特徴付けられよう。

さて、この「スコットランド語」を歴史的視点から見ると、1603年の

同君連合以前の「古期スコットランド語 (Old Scots)」の時代、同君連合以後の英語化の時代、20世紀の Scottish Renaissance の時代、そして現代というように大まかに4つに分けることができる。まず、400年近くに及んだローマ軍によるブリタニア駐留支配は、407年のローマ軍の撤退によって、ブリテン島全域の歴史を大きく変えることになった。300年から700年ごろまでの、ローマ軍の直接の支配を受けなかった、「ハドリアンズ・ウォール (Hadrian's Wall)」以北の現在のスコットランドを中心とした地域の民族の分布は、おおよそ、中部から北部にかけての高地地方は先住民族であった「ピクト人 (Picts: ケルト系)」の地域、西部アイルランド寄りの地域は「スコット人 (Scots: ケルト系)」の地域、南西部から北上してきた「ブリトン人 (Britons: ケルト系)」の地域、そして南部東岸寄りの地区は、同じくブリテン島中南部から北上してきた「アングル人 (Angles: ゲルマン系)」の地域であった。これら4民族は互いに抗争を繰り返し、さらに8世紀末ごろからは、これらの民族間の抗争に乗じて、スカンジナビア人 (Norse) が西部島嶼地域に侵攻することになる。

このうち、イングランドとの国境からハドリアンズ・ウォールに至る地域、即ちノーサンバーランド (Northumberland) からやってきた、アングル人によって、現在のスコットランドにもたらされた「イングランド北部英語 (Northern English)」がいわゆる「スコットランド語」のベースとなり、全域に普及していったと考えられる。その際に、この点は余り指摘されないことなのだが、J. Miller. 'Scots: a Sociolinguistic Perspective.' In L. Niven and R. Jackson (1999) *The Scots Language: Its Place in Education*. Dumfries: Watergaw(46頁)でも述べているように、12世紀初頭から、フラマン人 (Flemings) たちがスコットランドに入植しており、当時のフラマン語 (Flemish) と北部英語が密接な関係にあったことを考えると、北部英語の普及、あるいはゲール語に対してゲルマン語の普及が、このフラマン人たちの移住・移入によって促進された可能性がある。

14~17世紀の期間は、北西部の高地地方や島嶼地区における「ゲール語 (Gaelic)」のみの母語話者を除けば、スコットランドのあらゆる階級の人々ほぼすべてが「古期スコットランド語 (Older Scots)」を話していたとみられる。現代の Scots の正確な位置づけについてはなはだ疑

問を抱いている多くの言語学者たちも、当時の Older Scots については、「独自の発音、文法、語彙、さらに驚くべきことに独自のつづりまで備えた、自律した国語(an autonomous national language)であった」(Aitken: 1985, 42) ことに異論はないようだ。

1603年にイングランドとスコットランドの国王(位)権が合併(同君連合)して以降、口語のみならず文語においても、ますます英語化されることになる。口語に基づいた、やや非公式な Scots の変種が、いくつかのジャンル、特に Robert Burns (1759-96) のように、詩において使われた。しかし、すでに1603年の同君連合を契機にしたゲール語衰退のプロセスの解説において指摘したとおり、当時の英語至上主義的傾向ははなはだしく、まさに詩人エドウィン・ミュアが表現したごとく「スコットランド人はスコットランド語で感じ、英語で考える」(本稿88-89頁参照) ような状況が浸透していき、スコットランド語の衰退は避けられない状況にあった。

20世紀になって、いわゆる“Scottish Renaissance”という波の中で、一連の影響のある作家たちに促されて、文語の Scots が復活し、奨励される。この作家グループは、過去の文献や低地地方(the Lowlands)に由来する方言の語法などに頼りながら、「折衷型変種(eclectic variety)」(Crystal: 1995, 333) を作り出した。これは、ときどき「模造合成の Scots (“synthetic Scots”)」だ、などと冷やかに指摘はされるが、*Lallans*(= Lowlands)²⁾として一般に知られているものである。1947年には「つづり字のスタイルシート(a Style Sheet for Spelling)」なるものが作られた。(McClure: 1995, 43)

現在では、より地域性の薄い諸変種から、シェトランド(Shetland)方言のような地域に限定された変種に至るまで、Scots による書き物は豊富に存在する。大抵は、書き手たちは例の「スタイルシート」などには頼らず、自分流のつづり字を用いているようだ。様々なつづり字をまとめて収容している *The Concise Dictionary* (1985) のような辞書類が利用されていると思われる。個人的な手紙やメモ、ラジオの台本原稿から、フィクション、聖書の本文、学術論文の原稿(例えば、Caroline Macafee (2001), *Scots: Hauf Empty or Hauf Fu?:*) などに至るまで、実質的に、あらゆるジャンルのものが Scots で表現されているといってい良いだらう。

総じて、Scots は、歴史的に築かれてきた、極めて独自性の高い音体系、文法および語彙を持っていて、しかも正書法がある程度確立しており文学的伝統もある。地域による方言の差も存在していて、国際的にはヨーロッパ・ユニオンの代理機関 (an Agency of the European Union) である、少使用言語ヨーロッパ部局 (the European Bureau of Lesser Used Languages) によって、一言語であると認定されている。このような客観的事実を考えると、Scots が独自の言語だと主張する人たちの立場も理解できないわけではない。¹³⁾

1.3. スコットランド英語 (Scottish English)

簡単に言えば、スコットランドのなまり (a Scottish accent) で発音され、その文法と語彙にスコットランド的な特徴 (Scotticisms) を少々含んだ標準英語 (Standard English) と定義できる。例えば、語彙の例として *wee* ('little'), *bonnie/bonny* ('beautiful'), *Hogmanay* ('New Year's Eve'), *kirk* ('church'), *loch* ('lake'), *nae* ('no') などがあげられる。

この変種 (variety) はしばしばスコットランド標準英語 (Standard Scottish English) とされており、少なくとも3世紀もの間、スコットランドの公用語 (official language) であった。強大な少数派である教育を受けた生粋のスコットランド人 (主として中産階級で高等教育を受けた人たち) の母語であり、それ以外の大多数の人々 (主として低地地方の労働者階級の人たち) の公的言語 (the public language) であった。(McArthur : 1992, 903)

ところが、スコットランドの主要な辞書類は、もっぱら前述の Scots ばかりに焦点を当て、この標準的な変種の成文化が不十分であるという点は注目に値するだろう。さらに次の Wells (1982 : 393) の指摘はスコットランドの言語事情の特色のひとつを示している。「RP がイングランドやウェールズで占めているような地位を、スコットランドでは必ずしも享受していないことだ ; つまり、イングランド英語のなまり (a local English accent) が必ずしも威信を持たないという点で、むしろスコットランドなまり (a Scottish accent) がある種の威信を持っているといえるのだ」。やや極端な言い方をすれば、スコットランドには、例えばエディンバラのインテリ階級の地域的・社会的方言の音声的特徴、いわゆる Edinburgh 'Morningside' accent¹⁴⁾、の中に独自の RP が存在する

といえるかもしれない。

そこでいまひとつ判然としないのが、「スコットランド語」と「スコットランド英語」の相違点、あるいは境界線である。両者の歴史的事実に基づいたその背景についてはある程度の情報が得られるのだが、その相違の境界線はどこにあるのだろうか。Aitken (1984) の言うように、「スコットランド語 (Scots)」と「スコットランド英語 (Scottish English)」がともに一つの言語連続体 (a linguistic continuum) を成すのであれば、その中間をなす様々な変種群の様態はどうなっているのだろうか。そこで、スコットランドにおける言語に関して、分かっている客観的事実だけを、基本的事実、歴史的事実、社会言語学的事実に分けて厳選・整理し、さらに地域の変種について入手可能な情報を整理し加えることにより、スコットランドの言語事情を多角的に考察する一助としたい。と同時に、その上で、ゲール語の置かれている立場を再認識し、さらにグラスゴーにおけるゲール語教育に焦点を絞りたい。

まず、基本的事実として言えることは、人口の圧倒的多数の人々が、発音・語彙表現・文法において標準英語とはかなり異なったタイプの英語の諸変種を日常話しているということである。そして、それら諸変種と標準語との相違の程度は、その話者の受けた公的教育の量にほぼ比例している。初等教育から高等教育に至るまでほぼ標準英語によって教育を受けるわけであるから、初等教育のみを受けた話者に比べ、高等教育まで受けた話者のほうが、標準英語による教育をより長期にわたって受けたことになるからである。

また、知的職業についている人々でも、RP や BBC English などとはかなり異なった、スコットランドという地域性を反映した“発音”をしているが、同時に、例えば、グラスゴーの下町の労働者階級の人々が日常使っているなまりの強い Glaswegian Patter に代表されるような、いわゆる“Broad Scots”と呼ばれるタイプの“発音”ともまったく異なる発音をする。

つまり、十分な教育を受けた人々でも、各地域的特色で色付けされた発音で標準英語を話しているということであり、また各地域に住む人たちの間でも受けた教育の程度は様々であるから、必ずしも十分な教育を受けなかった、主として労働者階級の人々の発音は、十分な教育を受けた主として知的職業についている人々の発音とも大きく異なることにな

る。筆者が頻繁に足を運んだグラスゴーの地元のパブ、*The Doublet* に集まってくる人たちも様々で、家屋の解体業者 (Phil)、左官・タイル工 (Billy)、大工 (Colon)、庭師 (Clarke)、配管工 (Dunnery) など、労働者階級に属すると見られる人々の典型的なグラスゴー訛りの英語の発音や語彙表現 (Glaswegian Patter) と、新聞記者 (Tom)、建築家 (Jim、Graham)、大学教師 (Jacqueline、David)、元中・高教師 (Owen)、高校教師 (Lena)、地元ラジオ放送局のプロデューサー (Jess)、作家 (Ian)、元船長・地元の名士 (John)、画家・ギター奏者 (Jimmy)、サラリーマン (Barry)、BBC 音楽技師 (Ewen)、画家 (Bobby)、映画製作照明・カメラマン (Paul)、音楽教師 (Chris)、日本帰りの建築家 (Mary)、看護婦長 (Liz、Melanie)、グラスゴー大学院生 (Tony) など、知的職業についている人々や学生達の英語 (特に発音・イントネーション) とは明らかに違っていた。¹⁵⁾

大多数の人々は、ある種の「スコットランド英語」で話すのだが、書くときには標準英語もしくはそれにきわめて類似した英語を用いる。つまり、総じて「スコットランド英語」の特徴の大部分は発音にあり、それに地域的な語彙表現と若干の文法的特徴やゲール語からの借用語・表現が加わったものといえる。また、ゲール語については、国勢調査 (2001) において、総人口のほんのわずかな人々 (1.2%) が自分をゲール語話者だと報告しているが、そのほかに、口語・文語ともに日常生活で主要な言語としてゲール語を駆使しているのではなく、時々、しかも話し言葉や書き言葉でしか使わないものもいるので、一口にゲール語話者といっても様々であり、その辺の詳細な調査が今後必要となろう。¹⁶⁾

「標準英語」、「各種スコットランド語 (Broad Scots も含めて)」及び「ゲール語」のほかにも使われている言語があることも基本的事実として明記しておく必要がある。例えば、きわめて小集団によってはあるが、イタリア語、ウルドゥー語 (Urdu)、ヒンディー語 (Hindi)、パンジャビ語 (Punjabi)、広東語 (Cantonese) など使用されている。

以上が、総合的な基本的事実として明記すべきことであるが、これをいわば横軸として、さらに縦軸に相当する、言語史上重要な歴史的事実を幾つか掻い摘んで検討することにより、「スコットランド英語」を立体的に概観することが可能である。まず、大まかに言って、かつてはゲール語がこの国の大部分を占める地域で話されていたが、現在では西

部および北西部の高地地方及び島嶼地域に限られるようになったという歴史的実情がある。これは現在の「スコットランドにおける言語事情」および「スコットランド人話者達の言語意識」の基盤をなしている。次に、ストラスクライド (Strathclyde) とカンブリア (Cumbria) 及びその先に細長く帯状に延びる地域では、かつてウェールズ語が話されていたが、のちに絶滅した。このことが現代のスコットランド英語にどう関わったかは明確でないが、歴史的実情としてあげておく必要がある。次に、スコットランド北部及び西部地域のノース人による入植地では「古代ノルウェー語 (Norse)」が話されていたことがあげられる。現在でもこの地域の住民達は、自分達がバイキングの血を引く民族であることを強く意識しており、例えばシェトランド諸島では歴史的にノルウェーのベルゲンとの交流が強く、それを裏付ける民族資料館が各地に存在する。¹⁷⁾

さらに、前述のピクト人たちは非印欧語族の言語を話していた可能性が高いが、その後ゲール語を採用したらしいことを挙げることができる。しかし、以前にも指摘したように、入手できる資料が遺跡のみで、極めて限られており、推測の範囲を出ない。また、前述の“Broad Scots”は、元々はノーサンバーランドから来たアングル人により、現在のスコットランド地域にもたらされた「北部英語 (Northern English)」の末裔であり、この北部英語が後の「スコットランド語」となり、スコットランド全域に普及していったのだが、1603年の同君連合 (the Union of the Crown) 以降、標準英語の影響を受け、文語は別として、口語においては衰退していったという経緯があり、このプロセスは、現代の「スコットランド語」と「スコットランド英語」との位置づけにおいて重要である。

最後に、過去100年ぐらいの間に、様々な言語を話す移民がスコットランドに移入してきたことも無視できない。具体的には、イタリア語、ポーランド語、ウクライナ語、広東語、ウルドゥー語、ヒンディー語、パンジャビ語などであり、特に最後の4言語はその話者達がより多く関わっている社会医療サービス、警察、教育などの分野の日常語に影響を及ぼしていると思われる。

以上の、基本的事実と歴史的実情を踏まえて、さらに社会言語学的・教育的実情を考慮しつつ、「スコットランドの言語事情」の立体的かつ

多角的な考察を試みる。まず、「スコットランド語」から「スコットランド英語」に至るまでの言語連続体上にある様々な言語変種は、話し言葉のレベルでは豊富な機能と言語使用域 (Registers) を備えているとみられるが、書き言葉のレベルでは、法律用語などを除けば、まだ標準英語から脱し切れていない。そして、話し言葉のレベルにおいて、例えば “Broad Scots” の発音及び文法は、公共の場や形式ばった場面では一般に容認されておらず、地域的特色を帯びたスコットランド英語や標準英語が使われる。したがって、あえてこの “Broad Scots” の発音及び文法・語彙表現などを調査しようとする、そのような話者達が日常たむろし、気軽に会話している場所に直接赴いて資料を収集したり、¹⁸⁾ “Broad Scots” を使って演技するコメディアンや俳優などの映像・音声を二次資料として収集する必要がある。¹⁹⁾

このような “Broad Scots” の発音及び文法は、教育機関、ホワイトカラーの職場などのドメインでは基本的に使われていないため、例えば、“Broad Scots” を話す家庭で育った子供が就学した際に、生徒の学習上の負担が大きくなる。やや大げさな言い方をすれば、スコットランドの言語変種の多様性が、就学する生徒たちに深刻な学習上の問題を引き起こしていることになる。一般に、“Broad Scots” で育った生徒たちは、学校ではまず標準的な口語の「スコットランド英語」を身につけると、さらに文語の標準英語を身につけるという2段階の障壁を克服せねばならない。また、英語以外の言語 (ゲール語はもちろんイタリア語やウルドゥー語など) を母語とする生徒たちも、同様に複数の障壁を乗り越えねばならない。一方、家庭で標準的なスコットランド英語を使用している生徒の場合には、口語から文語への障壁を1回乗り越えるだけで済むことになる。

最後に、スコットランド全体を通じた地域的変種についての整理を試みる。まず、高地地方 (the Highlands) では、18世紀にゲール語 (Gaelic) から英語 (English) への移行が始まり、「スコットランド語 (Scots)」もほとんど話されなくなってからは、基本的に使用言語は「スコットランド英語 (Scottish English)」だが、基層言語であった「ゲール語 (Gaelic)」の影響が多少散見される。一方、「スコットランド語 (Scots)」の使用地域となると、常に2大都市グラスゴーとエディンバラを含む、低地地方 (the Lowlands) と結び付けて考えられてきた (す

でに指摘した用語 Lallans 参照)が、実際には、北方諸島 (the Northern Isles) (オークニー (Orkney) やシェトランド (Shetland)) およびスコットランド本土 (mainland Scotland) の北東地方の一部 (the north-eastern part) にまで及ぶようだ。また、アバディーン地方 (the Aberdeen area) には独特のなまりがあることで知られており、低地地方グラスゴウの Kelvinbridge 地区付近での労働者階級の人々のなまりも “Glaswegian Patter” として有名である。

「スコットランド語 (Scots)」の地域変種の中でも、シェトランド (Shetland) オークニー (Orkney) および、これよりも程度が薄い、ケイスニス (Caithness) は「スコットランド語 (Scots)」が、スカンジナビア語を基層言語としながら、“移植されて (planted)” きたという点で、特異な背景を持つ。これらの地域は1469年²⁰⁾まではヴァイキングの支配下にあったため、使用言語は「ノルン語 (Norn)」といわれるスカンジナビア語の一変種であった。実はこの言語がこれらの地域で話された最初のゲルマン系言語だったのである。「ノルン語 (Norn)」から「スコットランド語 (Scots)」への移行については、幾多の歴史的事件に見舞われた他の地域と違って、比較的緩やかであったであろうが、その点に関する文献が少ないために、「ノルン語 (Norn)」が実際にいつごろ消滅したのかについては不明である。Gunnel Melchers and Philip Shaw (2003) によれば、現代のシェトランド方言はスコットランド語の一方言とみなすべきであろうが、Crystal (1995) ではこれに「ノルン語 (Norn)」というラベルを貼っており、これは明らかに誤解を招くことになる。ただし、この点については、異論もあるようだ。²¹⁾ また、シェトランド (Shetlanders) やオークニーの人たち (Oradians) の中にもそのようなロマンチックでやや非現実的な見方をする人がたくさんいるのも事実である。

シェトランドの人たちは一般に、シェトランド方言 (Shetland dialect) と標準英語とを別個の変種 (discrete varieties) として身に付けており、両者を日常使い分けている (bidialectal)。したがって、筆者が当地の Pub や牧場、家屋の建設現場、民族博物館などで調査した際も、直接現地の人との対話に支障をきたすことはそれほどにはなかったが、現地の人同士の会話を理解することは困難であった。これに対し、他のスコットランドの諸変種 (Scottish varieties) の大部分は2つの言

語変種間に複雑な相互交織作用 (interplay) を示していて、両者が別個 (discrete) というのではなく両者の間に連続的 (continuum) な変容が見られる。この連続体に沿って、発話者たちは両方の言語体系それぞれに属する言語的特徴を容易に入手選択して、その場の状況や聞き手の違いにしたがって自分たちの発話を順応させているのだ。例えば、エディンバラとグラスゴーでの社会言語学的な調査によると、エディンバラの話者のほうがグラスゴーの話者に比べて、より標準的な変種に対する志向性が高い傾向があるという。(Chirrey: 1999, 223ff)

2. グラスゴーにおけるゲール語教育

2.1. Bunsgoil Ghàidhlig Ghlaschu の歴史と近況

私がこの学校を視察に訪れるきっかけになったのは、行きつけの地元のパブ *the Doublet* で、この近くにゲール語教育をしている小学校があるという情報を聞きつけたことだった。バーテンの Mr Gordon によると、2階のサルーンで同じくバーテンをしている Shona さんがその小学校でも働いているので、校長先生を紹介してくれるという。そんないきさつでその校長先生 (Head Teacher) Ms Donalda McComb さんに正式にお手紙を書いたところ、すぐに返事が来て、その次の週に学校を見学させてもらうことになったのだ。

実はその小学校は Bunsgoil Ghàidhlig Ghlaschu (Glasgow Gaelic School) といって、スコットランドで唯一の、独自のカリキュラムに基づき、ゲール語ですべての教育をおこなっている (Gaelic Medium Primary School)、ゲール語教育史上記念すべき、由緒ある小学校だったのだ。私の住んでいたグラスゴー、ウエスト・エンドのケルビンブリッジ (Kelvinbridge) 地区の住まいから、歩いて数分の、Ashley Street にあった。

待ち合わせの時間に学校の玄関の呼び鈴を押すと、ドアが開いて比較的若い上品な女性が現れた。Ms Donalda McComb 校長ご自身が私を迎え入れてくれたのだ。簡単な挨拶をしてから校長室へ案内され、多忙の中しばらく僕の質問を受けてくれた。学校の規模、生徒数、生徒たちの背景、授業科目、カリキュラム、ゲール語教育の形態、教科書などについて一つ一つに誠実に答えてくれ、さらに、スコットランド全土でゲー

ル語教育を実施している保育園、小学校、中学校の一覧表と、それぞれの学年ごとの生徒数の一覧表など各種資料、この学校のハンドブック、教科書などをくださった。

その後、これはあらかじめ電話でうかがってはいたのだが、6年生で日本文化を扱っているクラスがあるので、参加してほしいと依頼された。校長先生が私を2階のその教室まで案内してくれ、担任の先生、Mrs Morag Hunterさんと生徒たち約30名に紹介してくれた。私は Ciamar a tha thu ? “Keemar a ha u?” (= How are you ?) Tha gu math . “Ha gu ma .” (= I’m fine .) Tapadh leibh . “Tapa leev .”(= Thank you .) などと簡単なゲール語で皆さんに挨拶した。実は昨日、*the Doublet* の友人 Owen Hagan (このパプでの重要な資料提供者の一人で、長年教師をされた後退職され、今は青少年の再教育に携わっておられる) から、ゲール語の簡単な挨拶表現を教わっておいたのだ。私の意外な挨拶に、生徒たちも驚いたが、何人かの生徒はゲール語で対応してくれた。McComb 校長と担任の Hunter 先生はもっと驚いた様子であったが、思わず拍手で応対してくれた。

校長が退席した後、Hunter 先生が、これから生徒たちが日本の事について質問するので答えて欲しいという。予想外の展開だったが、英語で答えていいというので、喜んでお引き受けすることにした。「あなたは結婚しているのか?」、「子供は何人いるのか?」、「名前はなんというのか?」、「日本の自動車会社はどの会社もスポーツカーを製造しているのか?」、「新幹線はどれくらい速いのか?」、「相撲レスラーの体重はどれくらいあるのか?」、「tea ceremony は毎日やるのか?」、「セルティック (Celtic) の中村俊輔選手ぐらいうまいプレーヤーは日本にたくさんいるのか?」などなど、いかにも子供らしい質問から、なかなか答えに窮するような、しかし率直な質問が延々と続く。日本の自然、植物、食事、食べ物、運動、富士山、新幹線 (bullet train) 自動車、茶の湯、華道、相撲、音楽、楽器、家族、家族の名前や年齢など様々な質問が出た。教室には、大きな富士山や京都の写真付きのカレンダーやポスターが貼られ、番傘、浴衣のような着物、扇子など日本関係の書物や土産物などが飾られていた。生徒たちの持っているテキストを見ると、すき焼きやてんぷらなどの日本料理の絵が塗り絵になっていて、生徒たちが思い思いの色でそれを塗り、それぞれの食材の名前がローマ字で書

き加えてあった。料理の名前が空欄になっていたの、黒板、いや白板にマーカーペンで大きく“sukiyaki”, “tempura”, “sashimi”などと書いて、簡単に説明してあげた。

一人一人の生徒の質問を先生が分かりやすい英語に翻訳してくれ、私が英語で答えると、大体生徒には理解できるが、もう一度先生が僕の応答を繰り返してくれた。誰の質問を受けるかは Hunter 先生がコントロールしてくれ、満遍なく、ほとんど全員が2～3回ぐらいは発言したので、70～80問ぐらいに答えたことになる。あっという間に小一時間が過ぎて、授業が終了となった。日本から持ってきた桜の花の絵の入った絹のハンカチを皆さんにプレゼントして、「タパレット (Thank you!)」「チリ! (Good-bye!)」と、またゲール語でお別れの挨拶をした。今度は生徒が全員で「チリ! チリ!」と別れを惜しんでくれた。校長室に戻ると、親たちの対応や先生たちへの指示で、なにやら忙しく走り回っていた校長が再び現れて、関連資料と先生のメールアドレスを教えしてくれ、ほかに質問があれば対応してくれることになった。

この学校ではすべての授業をゲール語で行っており、英語とゲール語両用方式や、第2言語(外国語)科目としてゲール語を教えている学校が多い中では極めて先進的なゲール語教育をしているといえる。校長先生への私の質問の中に、「この後の教育はどうなっているのか?つまり、次の段階としての中学校や高校でこのようなゲール語による教育をやっている学校はあるのか?」という項目があったのだが、彼女によると、来年、つまり今年の2006年8月にグラスゴーで初めて、完全にゲール語で教育を実施する中学校が、近くの Woodside Campus に発足するのだという。この小学校、“The Bunscoil Ghàidhlig Ghlaschu (Glasgow Gaelic School)”が、スコットランドで最初の、独自のゲール語による(Gaelic medium)教育を実践し、極めてよい成績を修めてきたので、それを踏み台にして、今度はスコットランドで最初の独自のゲール語による教育(最終的にS1～S6までの全中学校教育)を実施する中学校、“Taobh A’Choille-The New Sgoil Ghàidhlig Ghlaschu”が新たにグラスゴーに誕生するというのだ。今までも、グラスゴーでゲール語教育を比較的積極的に行ってきた中学校、Hillpark Secondary Schoolでの教育サービスは、当面の移行期間中は引き続き行われることになり、近い将来 Woodside Campus に開設される“Taobh A’Choille-The New Sgoil Ghàidhlig

Ghlaschu”に合併吸収されることになるそうだ。さらに、この新設される Woodside Campus には、小学校部 (Primary Section) も併設され、最終的にはこの小学校はそこに移転することになるのだという。

実は、私が視察した小学校 The Bunsgoil Ghàidhlig Ghlaschu (Glasgow Gaelic Primary School) (下線筆者) は 2005 年 6 月に正式に閉鎖され、同年 8 月に “The Sgoil Ghàidhlig Ghlaschu (Glasgow Gaelic School)” (下線筆者) として再開設されていたのだ。新設される Woodside Campus に移転するまでの間は、移行期間が設けられ、新たに再開設された “The Sgoil Ghàidhlig Ghlaschu (Glasgow Gaelic School)” の小学校部は、2006 年 8 月に予定されている新キャンパスへの移転までは、今までの Ashley Street に留まる事になったという。したがって、私が訪問したのはこの移行期間中だったのである。校長先生を初めとして他の先生方も何かと忙しいはずであった。

新設される The Woodside Campus (名称は Taobh A'Choille) は、“Pre-5” 部門 (Pre-5 Section)、小学校部門 (Primary Section) 及び中学校部門 (Secondary Section) の 3 部門を擁するいわば、「ゲール語教育を柱にした一貫総合学校 (The 3~18 Sgoil Ghàidhlig Ghlaschu)」ということになる。この内の小学校部は、The Gaelic Medium Primary であるから、“The 5~4 National Guideline” に沿った広範なカリキュラムが、ゲール語を流暢に使いこなす教師たちによって提供され、さらにそのカリキュラムの中には、バグパイプ、伝統的歌唱、伝統的舞踏、shinty²²⁾ のような伝統的スポーツなどを含むスコットランドの文化的遺産がふんだんに盛り込まれることになるという。

2.2. 教育方針とゲール語教育の意義

この学校の特徴はすでに指摘したように、“Gaelic medium school” であるから、ゲール語を教育手段として用いて、スコットランドの他のすべての小学校と同じ科目を提供し、同じカリキュラム (“25~14 curriculum”) に従って教育が行われている。具体的には、生徒が小学 1 年生に入学した瞬間から、ゲール語を聞きながら学校生活を送ることになるということであり、基本的にすべての科目、Reading, Writing, Talking and Listening, Modern Language (German), Mathematics, Environmental Studies, Expressive Arts (Music, Drama), Physical

Education (各科目の具体的内容については後述)などの授業がすべてゲール語で行われる。この学校の『ハンドブック2005 - 2006』(*BUNSGOIL GHÀIDHLIG GHLASCHU LEABHAR FIOSRACHAIDH (GLASGOW GAELIC SCHOOL HANDBOOK 2005-2006)*)³⁾の冒頭に Donalda T. McComb 校長のあいさつ文があり、その直後に、この学校の教育方針(使命)についての声明文、“Bunsgoil Ghàidhlig Ghlaschu Teachdairachd Taisbeau (Glasgow Gaelic School Mission Statement)”が英語で掲げられていた。実は、先に行った校長先生へのインタビューの中で、ここの生徒たちの40%が家庭内でゲール語を用いていて(Gaelic homesと表現していた)つまり英語とゲール語のバイリンガルであり、あとの60%は英語のモノリンガルだということだ。しかも、99%の生徒の母語は英語なのだという。したがって、このハンドブックも大部分が英語で解説されているのである。

声明文曰く、“Our school aims to support and develop every child to ensure he or she will achieve their full potential and become skilled individuals ready to play their part in society.” 試訳すれば、「わが校では、すべての生徒が各自の全能力を發揮し、社会に出てから各自の役割をりっぱに果たすべく準備がかなうような技能を身に付けることが確保されるように、生徒を助け、その能力を開発することを目指します。」ということになるうか。

そして、その次の頁に、“THE ADVANTAGES OF BECOMING BILINGUAL”とあり、「バイリンガルになることの利点」が6分野に分けられ、合計10項目にわたり示されていた。実はここが極めて重要なことであり、現在のスコットランドにおけるゲール語教育の意義とも直結する内容となっている。すでに指摘したように、ゲール語のみが日常生活の中で常時話され、書かれているという生活状況は、グラスゴーという大都市では少なく、せいぜいスコットランド北部及び北西部のハイランド地方、さらにはヘブリディーズ諸島を中心とする島嶼地域にしか見られないはずである。この学校に通う児童の家庭の40%が英語とゲール語両方を用いて生活している。あとの60%の家庭では英語しか日常使っていないのだから、おそらくご両親や祖父母が北部出身で、子供たちに是非ゲール語を身に付け、ゲール文化に愛着をもち、さらには誇りを持って欲しいとの親達の願いから、子供達をこの学校に入学させたとか、

あるいはその他の理由で純粋にゲール語を身に付けさせて将来に役立てさせようとの願いから入学させたとか、また後で指摘するように、この小学校の生徒達の学業成績が他の小学校よりかなり良いので（つまり、単純に学校のレベルが高いので）この学校を選んだ、などの理由が考えられよう。したがって、そのような多様な背景を持つ保護者や子供達に、ゲール語教育を柱にしたこの小学校へ多くの生徒が入学してもらうためには、何よりもゲール語を身につけて英語とゲール語のバイリンガルになることの利点を掲げることは極めて重要であろう。この点はまさに先ほども指摘したように、スコットランドにおけるゲール語教育全体が抱える普遍的問題でもあるのだ。

『ハンドブック』に掲げられている、その利点の数々を次に紹介する。

コミュニケーションにおける利点

- 1) より広いコミュニケーションが可能になる（具体的には、家庭間の交流、共同体内での交流、国際的な交流、雇用の可能性などが拡大する）、“二言語使用は選択の可能性が2つ”に増加することであり、異なる言語社会間の“架け橋役（bridge builders）”になれる。
- 2) 2言語読み書き能力（教養）が身につく：二つの異なった世界観と価値観を身につけることができる；それによって言語能力の機能が増す；それがさらに多くの業績の達成（出世）につながる。

文化的利点

- 3) より広い文化（順応同）化（enculturation）、“深化された（deep）”個人的文化化（miniculturalism）、二つの“言語世界（language worlds）”体験などが可能となる。つまり、世界を見るための2つの窓を備えることができる。
- 4) より大きな寛容の精神と、より控えめな民族主義？（なぜか？印がついており、当局に対するささやかな抵抗と、一般市民への迎合か。）

認知思考的利点

- 5) 思考力を向上させる利点がある（例えば、創造的思考、コミュニケーションへの感受性などを向上させる効果がある）

人格形成上の利点

- 6) 自尊心の向上

7) 自分のアイデンティティーの所在の明確化

履修過程 (Curriculum) における利点

8) より高度なカリキュラムを達成できる

9) 第3言語を習得するのが楽になる

現金収入への利点

10) 実利と雇用の促進。これこそバイリンガル主義の付加価値性である。

(下線部筆者)

実に具体的で、実用性 (特に下線部) に満ちている。実は、この視点こそ、親達の本音をついた説得力のある、まさに“利点”なのかもしれない。職と利益 (富) を求めて北部及び北西部ハイランド地方や、島嶼地方の故郷から産業都市に“登って”きた世代の親達、祖父母達の心情としてみれば、子供達、孫達の豊かな生活こそが、かけがえのないゲール語文化の尊厳と同時にうそ偽りのない望みでもあるのではないか。

23. 生徒数とスタッフ構成

入学手続きをした生徒の数については、多少の変化はあろうが、校長先生からいただいた資料によれば、次の通りである。この資料と、次に示す各種資料1~4を基に、スコットランド全土の小学校との比較・分析を試みる。

現在の生徒数 (Àireamhan de Chloinne (Present Roll))

P1	27
P1/2 ²⁴⁾	24
P2/3	24
P3	27
P4	26
P5	26
P6	20
P7	20
Total	194
立案定員 (Planning Capacity)	231
運営定員 (Working Capacity) ²⁵⁾	207

この数字を見ると、低学年 (P1~P5) はほぼ同数の26~27名と安

定しているが、高学年（P6 - P7）で生徒数がそれぞれ20名に減少している。つまり、高学年になるとドロップ・アウトする生徒が多少出ることである。なお、この小学校は特定の宗派が経営する小学校ではなく（non-denominational school）、しかも1学年（Primary 1）から7学年（Primary 7）まですべて男女共学の小学校（co-educational school）である。私が参加した6学年のクラスでは、男女比は、4対6で女子がやや多く、人種的には30名中黒人が一人いただけであり、アジア系の生徒はいなかった。

この数字を、スコットランド全土に分布する、ゲール語を用いた授業を少しでも実施している小学校61校の生徒数（「資料1」²⁶参照）と比較してみると、グラスゴーにただ1校だけしかないこの小学校の生徒数がいかに多いかが一目でわかる。この61校中、Glasgowの本校、Bunsgoil Ghàidhlig Ghlaschuは生徒総数172名（本年度：2005 - 2006は194名）でずば抜けて多く、次に多いのがSkye島のPortree校113名、次がInverness: Central校の100名、Condorrat校91名、East Kilbride: Mount Cameron校83名、Edinburgh: Tollcross校80名といった具合である。いずれも、大都市（Glasgow、Inverness、Edinburgh）あるいは、ゲール語教育のメッカともいえるSkye島などで生徒数が多数を占めているのがわかる。

又、「資料1」には各学年別の生徒数もすべて載っているので、学年進行に応じた生徒数の推移も観察可能であり、各地方自治体の議会区分と場所も明記されているので、地域別の生徒数、学年別推移などの比較も把握可能である。学年進行に応じた推移については、生徒数50名以上の学校群について検討してみると、本校、Condorrat校、Stirling: Riverside校、Edinburgh: Tollcross校などに見られるように、低学年に生徒がより多く、高学年にいくに従って生徒数が減る傾向にあるタイプの学校群と、Lewis島のBack校、East Kilbride: Mount Cameron校、Fort William RC校、Inverness: Central校などのように、必ずしもそのような傾向を示さないタイプの学校群とに分かれるようだ。Skye島のPortree校のように、高学年でむしろ生徒数が増加している学校さえ見られる。そこで、生徒数30名から50名未満の小学校について再検討してみると、やはり同じように、高学年になるに従って減少傾向にあるタイプの学校群（Bishopbriggs: Meadowburn、Skye島のBroadford、Oban:

St Columba's、Skye 島の Staffin、Lewis 島の Stornoway、Tain : Craighill など)と、そのような傾向を見せないタイプ(つまり、Skye 島の Sleat、Morar : Lady Lovat などのように各学年を通じて平均していたり、Aberdeen : Gilcomstoun、Balivanich、Benbecula、Lewis 島の Laxdale、Lionel、Ness などのように学年ごとに増減があり不規則なもの)の学校群とに分かれるようだ。したがって、学年による変化の傾向は地域差(都市地域であるか、島嶼地域であるか)あるいは、学校の規模(生徒数の多少)によってかなりのばらつきがあるようだ。しかし、スコットランド全土の学年別生徒総数を見れば、P 1 : 328名、P 2 : 308名、P 3 : 331名、P 4 : 295名、P 5 : 287名、P 6 : 235名、P 7 : 224名であるから、低学年から高学年になるにしたがってほぼ規則的に生徒数が減少する傾向にあるのは明らかである。

「資料 1 - a」は、地域別(各地方自治体の議会区分別)の生徒総数を比較したもので、各地域の面積順に配列され、人口も同時に示しておいた。各地域の広さ及び人口とゲーリック・スクールの有無や総生徒数との関係が分析可能である。まず、スコットランドには32の Council Area(地方議会区分)があり、そのうちゲーリック・スクールを持つのは14区域で、残りの18区域には存在しない。これら14区域の分布と学校数が「資料 1 - c d」の図と表に示されている。これによりこの種のゲーリック・スクールが、グラスゴー、エディンバラ、スターリングなどの大都市を除けば、主として本土の北西高地地域及び北西島嶼地域に集中していることがよく分かる。これはゲーリック母語話者の分布をほぼ正確に反映している。14区域のうち、生徒総数の多い地域を順に挙げれば、スコットランド本土の北西高地地方全域をカバーする THC (The Highland Council)(19校730名)、スコットランド北西海域に浮かぶヘブリディーズ諸島 CNES (Comhairle nan Eilean Siar : The Western Isles のゲール語名)(25校491名)、スコットランド第1の人口を誇る産業都市グラスゴー GCC (Glasgow City Council)(1校172名)、スコットランド北西部の本土と諸島の南半分を占める A&BC (Argyll and Bute Council)(6校152名)などが群を抜いており、150名以上の生徒を抱えている。ただし、グラスゴーの当校ではたった1校で172名の生徒数を擁しているのに対し、北部高地地域や北西部島嶼地域ではそれぞれ19校と25校の合計であるから、これらの地域での各学校の総生徒数はグラス

ゴー校ほどには多くはない。さらに、NLC(North Lanarkshire Council)(1校91名)、SLC(South Lanarkshire Council)(1校83名)、ECC(Edinburgh City Council)(1校80名)、SC(Stirling Council)(1校56名)、ACC(Aberdeen City Council)(1校47名)、EDC(East Dunbartonshire)(1校42名)と続いているが、これらの学校群はいずれもエディンバラ、アバディーン、スターリングなど大都市にそれぞれ1校ずつ配置され、比較的多数の生徒数をもつ“都市型のゲーリック・スクール”といえる。一方、THCやA&BCなど北西部高地地方及びCNESのような北西部島嶼地域に多数分布する学校群は、人口密度も低い地域であることを反映して、生徒数が比較的少ない“地方型ゲーリック・スクール”といえよう。

「資料1-a」は、面積の広い順に並べられているので、スコットランド北西部の広大な高地地域及び島嶼地域を含むTHC、A&BC及びCNESがその上位を占めているのは当然であるが、全般的傾向として、エディンバラとグラスゴーを結ぶ線を中心として、南北、あるいは北西と南東に広がるにつれて地域区分が大まかになっており、人口も希薄になる傾向があり、その中でゲーリック・スクールは、大都市を例外として、北西に濃く南東に薄く分布しているといえよう。人口密度との関係については、都市部と地方とは大きく異なる。都市部では、例えばグラスゴーに代表されるように、ヘブリディーズ諸島や高地地方から職を求めて移住してきた人々の家族子孫が集中しており、それを反映してゲーリック・スクールの生徒も一箇所に集中して増加する傾向が見られる。一方、地方の場合は、人口の比較的希薄な広範囲な地域に多数の学校が分散して存在するという状況がはっきり見て取れる。北西部島嶼地域(CNES)や本土北西部高地地方(THC、A&BCなど)において特にその傾向が顕著である。

「資料1-b」は各地域を人口の多い順に並べ替え、面積とその人口密度を表示して、各地域の生徒総数を示したものである。生徒の数、人口密度、地域性(都市、地方)等との相関関係の分析が可能である。

このほかに、次に示されている、「資料2:2004-2005年度におけるスコットランド全土の、ゲール語で指導している保育園(合計60施設存在する)と、その園児の人数の一覧表」を見れば、可能性として来年度のこの種の小学校への潜在入学者数と地域別の相違およびその将来的傾

向も予測可能である。スコットランド全土での、この種の園児総数は638名である。スコットランド全土のこの種の小学校の生徒総数2008名に比べ、ずいぶん少ないように思われるが、前年度にこのような小学校に入学した園児はこの年度の1年生、つまり328名であるから、園児のほぼ半数（実際には1年保育以上の園児もいる可能性があるので、さらにこの数字は下がると思われる）が、この種の小学校に入学する可能性があるということになる。しかし実際には人口の移動がかなりあると思われ、一概にそうとも言えないことと、この638名の園児のほぼ半数はゲール語教育の小学校以外の小学校に行く可能性が高いともいえるわけであり、そこにゲール語教育の現在、そして将来にかけての問題点が潜んでいるのではないだろうか。また、地域による生徒数の差もかなり大きい。Glasgowには3施設もあって、合計52名、Edinburghには25名というように、大都市により多く、地方、特に島嶼地域により少ない傾向が見られ、地方の過疎化傾向は免れない。ただし、グラスゴウの当校のように、家庭にゲール語話者のいる生徒は全体の約40%であり、あとの約60%は英語話者の家庭の生徒だという現実も考慮すれば、都市地域では、このような保育園からの小学校への入学率はさらに下がるのかもしれない。また、Glasgow（52名）とEdinburgh（25名）での園児数の差も無視できない。地方（特に、島嶼地域）からの移住者をより多く持つ産業都市としてのGlasgowの特色がここに顕著に現れているといえよう。

さらに、次の「資料3」は、2004 - 2005年度におけるスコットランド全土の、ゲール語による教育が行われている中学校、18校における学年別生徒数の一覧表である。これは、次の「資料4: スコットランド全土の、ゲール語を自由に(流暢に)使える話者で構成されているクラス(中学校)の学年別生徒数の一覧表」と合わせて、この種のゲール語教育が実施されているスコットランドの中学校における生徒数の学年別推移とその地域による相違などが観察でき、いずれも、その背後に潜んでいる問題点を垣間見ることのできる貴重な資料である。

まず、スコットランド全土におけるこの種の小学校総数61校及び同保育園総数60に比べ、ゲール語による教育を実施している中学校の総数が18校という少なさをまず指摘せねばならない。当然の事ながら、この種の教育を受けている中学生の総数も小学生の総数2008名に対し、6.5分

の1以下の307名である。ゲール語教育を受けている保育園児の総数(638名)と比較しても、2分の1以下である。ここにも、ゲール語教育の現実と将来にわたる厳しい問題が潜んでいる。小学校までにかなり充実したゲール語教育を受けてきた生徒達が、さらにその能力を向上させるための、中学校でのゲール語教育が手薄であるということは、ゲール語の普及に大きな障害となっている。と同時に、ゲール語文化の実像が、バグパイプに象徴されるケルトの音楽や、タータン・チェックのキルトに象徴されるケルトの衣装、ハギスに代表されるケルトの料理など、生きたケルトの言語、ゲール語を抜きにした、やや観光文化的“虚像”に埋没していく傾向がさらに進むことが懸念される。

グラスゴーに焦点を絞るならば、保育園におけるゲール語教育も、小学校におけるゲール語教育も、保育園数(グラスゴーだけで、Little Scholars、Oatlands、Rowena、の3つの保育園があり、Edinburgh、Fort William、Aberdeen、など他の都市でこの種の保育園を複数持つ都市はない)保育園児の総数(グラスゴーだけで3保育園合わせて53名であり、Dingwallの44名、Edinburghの25名、などを大きく上回っている)小学校の生徒総数(グラスゴーの本校が172名〔しかも、2005 - 2006年度には194名に増加している〕で最高であり、次に続くのがSkye島のPortreeの113名、Inverness: Centralの100名、Condorratの91名、East Kilbride: Mount Cameronの83名で、ライバルのEdinburgh: Tollcrossは80名である)など、数字を見る限り、スコットランド全土で最も盛んであると言える。にもかかわらず、中学校の生徒総数になると、必ずしもそうとは言えないという現実がある。即ち、中学校で生徒総数の最も多いのは、グラスゴーではなく、Skye島のPortreeで95名。次に多いのはNicolson Instituteの39名であり、Glasgow: Hillparkはその次の34名である。ちなみに、次のInverness: Millburnの30名を除けば、後の14校の平均生徒数はぐんと減り、8名弱になってしまう。

また、「資料4: 2004 - 2005年度におけるスコットランド全土の、ゲール語を流暢に使える話者で構成されているクラス(中学校)の学年別生徒数一覧(Gaedhlig Fluent Speakers) Classes in Secondary Schools: Pupil Numbers: 2004-2005)」では、この傾向がさらに鮮明に現れている。この種のクラスで生徒総数数の上位を占める中学校を挙げると、100名以上を擁するのがNicolson Instituteの177名、Skye島Portreeの

127名、Lionacleitの108名で、30～100名未満の中学校は、Inverness：Millburnの62名、Glasgow：Hillparkの54名、Plocktonの36名、Tarbertの32名、Edinburgh：James Gillespie'sの31名、Aberdeen：Hazleheadの30名となっていて、残りの27校の平均総生徒数は11.6名と少ない。それにしても、Glasgow：Hillparkは50名以上の総生徒数を持つ上位中学校5校のうちで、最下位である。

小学校であれほど熱心で、他の地域の追隨を許さなかったグラスゴウのゲール語教育は、中学校においては他の地域に比べて必ずしも優位に立てず、尻すぼみの状態をぬぐえないのだ。前述したように、来年、つまり今年の2006年8月に、スコットランドで最初の独自のゲール語による教育（最終的にS1～S6までの全中学校教育）を実施する中学校、“Taobh A'Choille-The New Sgoil Ghàidhlig Ghlaschu”が新たにグラスゴウに誕生するのだが、グラスゴウにおける中学校でのこのようなゲール語教育への“てこ入れ”の背後には、今述べたような現実があったのだ。新設されるThe Woodside Campus（名称はTaobh A'Coille）は、“Pre-5”部門（Pre-5 Section）、小学校部門（Primary Section）及び中学校部門（Secondary Section）の3部門を擁するいわば、「ゲール語教育を柱にした一貫総合学校（The 3～18 Sgoil Ghàidhlig Ghlaschu）」ということになる。この内の小学校部は、The Gaelic Medium Primaryであるから、“The 5～4 National Guideline”に沿った広範なカリキュラムが、ゲール語を流暢に使いこなす教師たちによって提供され、さらにそのカリキュラムの中には、バグパイプ、伝統的歌唱、伝統的舞踏、shinty²²のような伝統的スポーツなどを含むスコットランドの文化的遺産がふんだんに盛り込まれることになるという。このように装いも新たな、2006年度以降のグラスゴウにおけるゲール語教育の充実が期待される。

資料1：「2004 - 2005年度におけるスコットランド全土の、ゲール語による教育を実施している小学校とその学年別生徒数一覧（Gaelic-medium Education in Primary Schools：Pupil Numbers 2004 - 2005）」²⁶

【school】	【Council Area】	【P1】	【P2】	【P3】	【P4】	【P5】	【P6】	【P7】	【Total】
Aberdeen：Gilcomstoun	ACC	3	6	10	6	11	4	7	47
Acharacle	THC	6	1	6	2	2		5	22
Aird,Lewis	CNES	3	5	1	4	3	2	9	27
Airidhantuim,Lewis	CNES	2	4	4	1	2		1	14

Back,Lewis	CNES	10	10	6	7	10	10	2	55
Balallan	CNES	1	2	1	1	3			8
Balivanich,Benbecula	CNES	5	4	6	5	2		8	30
Barvas,Lewis	CNES	6	1	4	2	2	1	2	18
Bernera,Lewis	CNES	1		3	1	1	2		8
Bishopbriggs : Meadowburn	EDC	11	9	6	8	4	3	1	42
Bonar Bridge	THC	4	1	1					6
Bowmore, Islay	A&BC	4	3	2	3	5	4	2	23
Breasclete, Lewis	CNES	3	1	2	3	2	4	6	21
Broadford, Skye	THC	8	6	7	4	4	2	4	35
Carinish, North Uist	CNES	2	1	1	4		1		9
Carloway, Lewis	CNES	1		5	1	3	1	4	15
Castlebay, Barra	CNES	7	4	3	4	4	2	3	27
Condorrat	NLC	11	16	20	15	17	6	6	91
Daliburgh, South Uist	CNES	5	7	4	9	8	2	5	40
Dingwall	THC	7	10	11	9	9	10	8	64
Dunoon : Sandbank	A&BC	3	5	5	6	5			24
Dunvegan, Skye	THC	2	3	6	1	4	2	1	19
East Kilbride : Mount Cameron	SLC	9	10	19	11	13	9	12	83
Edinburgh : Tollcross	ECC	21	13	9	11	12	11	3	80
Eriskay	CNES		1		1	2	3		7
Forfar : Kirkriggs	AC	4	2	3	1	1	3		14
Fort William RC	THC	10	12	14	7	9	13	12	77
Gairloch	THC		7	6	1		2		16
Glasgow : Bunsgoil Ghàidhlig Ghlaschu	GCC	32	33	26	27	18	22	14	172
Greenoch : Highlanders Academy	IC	4	4	7	3	2	1		21
Inverness : Central	THC	14	11	13	16	18	15	13	100
Iochdar, South Uist	CNES	4	4	4	2	3	3	3	23
Kilmarnock : Onthank	EAC		3	7	3	4	6	2	25
Kilmuir	THC	6	2		2	1	5	3	19
Laxdale, Lewis	CNES	6	3	7	5	6	4	2	33
Leverburgh, Harris	CNES	3	1			2		1	7
Lionel, Ness	CNES	7	4	8	5	2	5	9	40
Lochcarron	THC	1	2	2	3	1	2	1	12
Morar : Lady Lovat	THC	4	6	8	7	7	3	6	41
Newtonmore	THC	4	6	3	3	4	2	2	24
Oban : St Columba's	A&BC	10	9	5	9	5	3	3	44
Paible, North Uist	CNES		1	1	6	2	3	1	14
Pàirc, Lewis	CNES	1	1	1					3
Perth : Goodlyburn	P&KC	1				1	1	1	4
Plockton	THC	1	2	3	1	3	2	1	13
Portree, Skye	THC	17	14	12	16	18	18	18	113
Salen	A&BC	3	1	7	7	6	4	1	29
Sandwickhill	CNES	1			3			4	8
Shawbost, Lewis	CNES	3	2	1	2	1	2	1	12
Sleat, Skye	THC	7	7	9	5	4	8	7	47
Staffin, Skye	THC	10	8	4	3	7	4		36

Stirling : Riverside	SC	13	10	11	11	5	3	3	56	
Stoneybridge, South Uist	CNES		3	3		5	2	4	17	
Stornoway, Lewis	CNES	8	7	6	6	10	1	3	41	
Strath of Appin	A&BC		2	4	3				9	
Tain : Craighill	THC	9	5	6	5	2	5	1	33	
Tarbert, Harris	CNES	1	1	2	2		1	1	8	
Tiree	A&BC		4	3		5	6	5	23	
Tongue, Sutherland	THC	3						1	4	
Uig, Lewis	CNES		1		1	1	1	2	6	
Ullapool	THC	6	7	3	11	6	6	10	49	
Total		61	328	308	331	295	287	235	224	2008

資料 1 - a : 「地域別生徒数一覧 (地域面積順)」

【No.of 1-d】	【Council Area】	【Area(km ²)】	【Population】 (2004)	【Pupil Numbers】 (2004-2005)
2	THC(The Highland Council)	25,659(1 st)	211,340(7 th)	730
12	A&BC(Argyll and Bute Council)	6,909(2 nd)	91,190(23 rd)	152
9	P&KC(Perth and Kinross Council)	5,286(5 th)	137,520(14 th)	4
1	CNES(Comhairle nan Eilean Siar)	3,071(7 th)	26,260(30 th)	491
11	SC(Stirling Council)	2,187(9 th)	86,370(26 th)	56
8	AC(Angus Council)	2,182(10 th)	108,560(19 th)	14
29	SLC(South Lanarkshire Council)	1,772(11 th)	305,410(5 th)	83
30	EAC(East Ayrshire Council)	1,262(15 th)	119,720(16 th)	25
23	NLC(North Lanarkshire Council)	470(19 th)	322,790(4 th)	91
25	ECC(Edinburgh City Council)	264(23 rd)	453,670(2 nd)	80
7	ACC(Aberdeen City Council)	186(25 th)	203,450(8 th)	47
16	EDC(East Dunbartonshire Council)	175(26 th)	105,550(20 th)	42
22	GCC(Glasgow City Council)	175(26 th)	577,670(1 st)	172
18	IC(Inverclyde Council)	160(29 th)	82,430(27 th)	21
.				
31	D&GC(Dunfries and Galloway Council)	6,426(3 rd)	147,930(11 th)	
4	AC(Aberdeenshire Council)	6,313(4 th)	232,850(6 th)	
28	SBC(Scottish Borders Council)	4,732(6 th)	109,270(18 th)	
3	TMC(The Moray Council)	2,238(8 th)	87,720(25 th)	
6	SIC(Shetland Island Council)	1,466(12 th)	21,940(31 th)	
13	FC(Fife Council)	1,325(13 th)	354,600(3 rd)	
32	SAC(South Ayrshire Council)	1,222(14 th)	111,850(17 th)	
5	OIC(Orkney Island Council)	990(16 th)	19,500(32 nd)	
20	NAC(North Ayrshire Council)	885(17 th)	136,020(15 th)	
26	ELC(East Lothian Council)	679(18 th)	91,580(22 nd)	
24	WLC(West Lothian Council)	427(20 th)	162,840(10 th)	
27	MC(Midlothian Council)	354(21 st)	79,610(28 th)	
15	FC(Falkirk Council)	297(22 nd)	147,460(12 th)	
19	RC(Renfrewshire Council)	261(24 th)	170,610(9 th)	
21	ERC(East Renfrewshire Council)	174(28 th)	89,610(24 th)	
14	CC(Clackmannanshire Council)	159(30 th)	48,240(29 th)	
17	WDC(West Dunbartonshire Council)	159(30 th)	91,970(21 st)	
10	DCC(Dundee City Council)	60(32 th)	141,870(13 th)	

資料 1 - b : 「地域別生徒数一覧 (地域人口順 : 2004)」

【Council Area】	【Population】	【Area/km ² 】	【Density】	【Pupil Numbers】
City of Glasgow(GCC)	577,670	175	3,301/km ²	172
City of Edinburgh(ECC)	453,670	264	1,718	80
Fife(FC)	354,600	1,325	268	0
North Lanarkshire(NLC)	322,790	470	687	91
South Lanarkshire(SLC)	305,410	1,772	172	83
Aberdeenshire(AC)	232,850	6,313	37	0
Highland(THC)	211,340	25,659	8	730
City of Aberdeen(ACC)	203,450	186	1,094	47
Renfrewshire(RC)	170,610	261	654	0
West Lothian(WLC)	162,840	427	381	0
Dumfries and Galloway(D&GC)	147,930	6,426	23	0
Falkirk(FC)	147,460	297	496	0
City of Dundee(DCC)	141,870	60	2,365	0
Perth and Kinross(P&KC)	137,520	5,286	26	4
North Ayrshire(NAC)	136,020	885	154	0
East Ayrshire(EAC)	119,720	1,262	95	25
South Ayrshire(SAC)	111,850	1,222	92	0
Scottish Borders(SBC)	109,270	4,732	23	0
Angus(AC)	108,560	2,182	50	14
East Dunbartonshire(EDC)	105,550	175	609	42
West Dunbartonshire(WDC)	91,970	159	578	0
East Lothian(ELC)	91,580	679	135	0
Argyll and Bute(A&BC)	91,190	6,909	13	152
East Renfrewshire(ERC)	89,610	174	515	0
Moray(TMC)	87,720	2,238	39	0
Stirling(SC)	86,370	2,187	39	56
Inverclyde(IC)	82,430	160	515	21
Midlothian(MC)	79,610	354	225	0
Clackmannanshire(CC)	48,240	159	303	0
Na h-Eilean Siar (Western Isles)(CNES)	26,260	3,071	9	491
Shetland Island(SIC)	21,940	1,466	15	0
Orkney(OIC)	19,500	990	20	0

資料 1 - c : 「地域別生徒数一覧 (生徒数順 : 2004)」

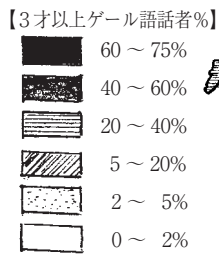
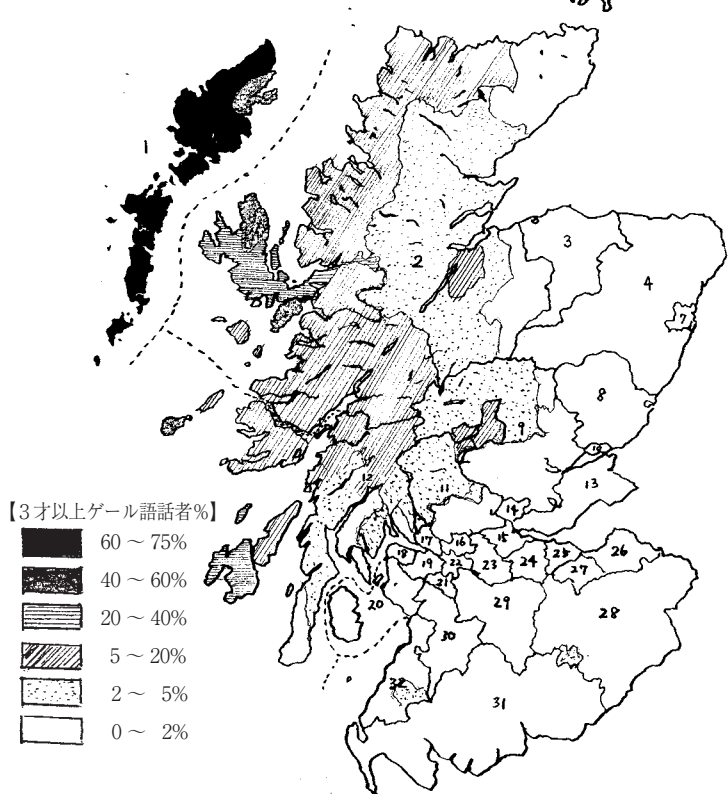
【Council Area】	【Population】	【Area/km ² 】	【Density】	【Pupil & Schools Numbers】
Highland(THC)	211,340	25,659	8/km ²	730(19)
Na h-Eilean Siar (Western Isles)(CNES)	26,260	3,071	9	491(25)
City of Glasgow(GCC)	577,670	175	3,301	172(1)
Argyll and Bute(A&BC)	91,190	6,909	13	152(6)
North Lanarkshire(NLC)	322,790	470	687	91(1)
South Lanarkshire(SLC)	305,410	1,772	172	83(1)

Stirling(SC)	86,370	2,187	39	56(1)
City of Aberdeen(ACC)	203,450	186	1,094	47(1)
East Dunbartonshire(EDC)	105,550	175	609	42(1)
East Ayrshire(EAC)	119,720	1,262	95	25(1)
Inverclyde(IC)	82,430	160	515	21(1)
Angus(AC)	108,560	2,182	50	14(1)
Perth and Kinross(P&KC)	137,520	5,286	26	4(1)
Fife(FC)	354,600	1,325	268	0
Aberdeenshire(AC)	232,850	6,313	37	0
Renfrewshire(RC)	170,610	261	654	0
West Lothian(WLC)	162,840	427	381	0
Dumfries and Galloway(D&GC)	147,930	6,426	23	0
Falkirk(FC)	147,460	297	496	0
City of Dundee(DCC)	141,870	60	2,365	0
North Ayrshire(NAC)	136,020	885	154	0
South Ayrshire(SAC)	111,850	1,222	92	0
Scottish Borders(SBC)	109,270	4,732	23	0
West Dunbartonshire(WDC)	91,970	159	578	0
East Lothian(ELC)	91,580	679	135	0
East Renfrewshire(ERC)	89,610	174	515	0
Moray(TMC)	87,720	2,238	39	0
Midlothian(MC)	79,610	354	225	0
Clackmannanshire(CC)	48,240	159	303	0
Shetland Island(SIC)	21,940	1,466	15	0
Orkney(OIC)	19,500	990	20	0

資料1 - d : 「スコットランド議会区分 (Council Area) とゲール語地域分布図 27)

- 1 CNES(Comhairle nan Eilean Siar)
- 2 THC(The Highland Council)
- 3 TMC(The Moray Council)
- 4 AC(Aberdeenshires Council)
- 5 OIC(Orkney Island Council)
- 6 SIC(Shetland Island Council)
- 7 ACC(Aberdeen City Council)
- 8 AC(Angus Council)
- 9 P&KC(Perth and Kinross Council)
- 10 DCC(Dundee City Council)
- 11 SC(Stirling Council)
- 12 A&BC(Argyll and Bute Council)
- 13 FC(Fire Council)
- 14 CC(Crackmannanshire Council)
- 15 FC(Falkirk Council)
- 16 EDC(East Dunbartonshire Council)
- 17 WDC(West Dunbartonshire Council)
- 18 IC(Inverclyde Council)
- 19 RC(Renfrewshire Council)

- 20 NAC(North Ayrshire Council)
- 21 ERC(East Renfrewshire Council)
- 22 GCC(Glasgow City Council)
- 23 NLC(North Lanarkshire Council)
- 24 WLC(West Lothian Council)
- 25 ECC(Edinburgh City Council)
- 26 ELC(East Lothian Council)
- 27 MC(Midlothian Council)
- 28 SBC(Scottish Borders Council)
- 29 SLC(South Lanarkshire Council)
- 30 EAC(East Ayrshire Council)
- 31 D&GC(Dunfries and Galloway Council)
- 32 SAC(South Ayrshire Council)



資料 2 : 「2004 - 2005年度におけるスコットランド全土の、ゲール語による指導を実施している保育園とその園児の人数一覧 (Gaelic-medium Nursery Units : Enrolment 2004-2005)」

【Nursery School】	【Council Area】	【Total】
Aberdeen : Gilcomstoun	ACC	7
Acharacle	THC	5
Back : Broadbay	CNES	23
Balallan	CNES	5
Barvas	CNES	5
Benera, Lewis	CNES	3
Bishopbriggs : Meadowburn	EDC	13
Bonar Bridge	THC	4
Borve	CNES	2
Bowmore	A&BC	3
Breasclete	CNES	2
Broadford	THC	19
Carloway	CNES	4
Castlebay	CNES	7
Condorrat	NLC	18
Daliburgh : Southend	CNES	19
Dingwall	THC	44
Dunoon : Sandbank	A&BC	9
Dunskellar	CNES	1
Dunvegan	THC	8
East Kilbride : Mount Cameron	SLC	12
Edinburgh : Tollcross	ECC	25
Eriskay	CNES	3
Forfar : Kirkcriggs	AC	2
Fort William RC	THC	19
Gairloch	THC	6
Glasgow : Little Scholars	GCC	8
Glasgow : Oatlands	GCC	9
Glasgow : Rowena	GCC	35
Greenock : Highlanders Academy	IC	8
Grimsay ; Eubhal	CNES	6
Inveraray	A&BC	19
Inverness : Central	THC	35
Iochdar	CNES	17
Kilmarnock : Onthank	EAC	6
Kilmuir	THC	3
Laxdale	CNES	12
Leverburgh	CNES	8
Lochcarron	THC	2
Morar : Lady Lovat	THC	7
Nairn	THC	20
Ness	GNES	11
Newtonmore	THC	5
Oban : Drummore	A&BC	8
Plockton	THC	4
Point	CNES	5

Portree	THC	18
Salen	A&BC	4
Scalpay	CNES	6
Sleat	THC	14
Staffin	THC	9
Stirling : Riverside	SC	14
Stornoway	CNES	10
Tain : Craighill	THC	7
Tarbert	CNES	11
Thurso	THC	16
Tongue	THC	2
Uig, Lewis	CNES	4
Ullapool	THC	18
West Side, Lewis	CNES	9
Total	60	638

資料 3 : 「2004 - 2005年度におけるスコットランド全土の、ゲール語による教育を実施している中学校とその学年別生徒数一覧 (Gaelic-medium Education in Secondary Schools : Pupil Numbers : 2004-2005)」

【School】	【Council Area】	【S1】	【S2】	【S3】	【S4】	【S5/6】	【Total】
Ardnamurchan	THC	7					7
Cumbernauld : Greenfaulds	NLC	6	2				8
Dingwall	THC	7	6				13
Farr	THC	2	1				3
Forfar	AC		1	4			5
Glasgow : Hillpark	GCC	14	6	12	2		34
Inverness : Millburn	THC	11	12	5	2		30
Islay	A&BC	5					5
Kilmarnock : Grange	EAC	5	4				9
Mallaig	THC	2	4				6
Nicolson Institute	CNES	18	21				39
Oban	THC	4		3			7
Perth	P&KC	1					1
Plockton	THC	8	6				14
Portree	THC	29	31	28	7		95
Shawbost	CNES	6	9				15
Tain	THC	4	5				9
Tobermory	A&BC	5	2				7
Total	18	134	110	52	11		307

資料 4 : 「2004 - 2005年度におけるスコットランド全土の、ゲール語を流暢に使える話者で構成されているクラス (中学校) の学年別生徒数一覧 (Gàidhlig (Fluent Speakers) Classes in Secondary Schools : Pupil Numbers : 2004-2005)」

【School】	【Council Area】	【S1】	【S2】	【S3】	【S4】	【S5/6 Access】	【S5/6 Int 1】	【S5/6 Int 2】	【S5/6 H】	【S6 AH/CSYS】	【Total】
Aberdeen :	ACC	8	3	7	8				4		30
Hazlehead											
Ardnamurchan	THC	7	1	4	2						14
Back	CNES	11	8								19
Bayble	CNES		1								1
Bishopbriggs	EDC	3	2	3	3			2			13
Castlebay	CNES	8	3	4	3			6	1		25
Cumbernauld :	NLC	6	2	2	3			1	1		15
Creenfaulds											
Daliburgh	CNES	6	8								14
Dingwall	THC	7	6	1	6			2	1		23
East Kilbride :	SLC	5	5	6	2			4			22
Claremont											
Edinburgh :	ECC	7	6	10	8						31
James Gillespie's											
Farr	THC	2	1	2	1						6
Forfar	AC		1	4							5
Gairloch	THC			1	1			2	1		5
Glasgow :	GCC	14	6	13	9		1	10	1		54
Hillpark											
Inverness :	THC	11	12	15	12			8	4		62
Millburn											
Islay	A&BC	5									5
Kilmarnock :	EAC	5	4								9
Grange											
Kingussie	THC	3	1	1	2		1	2	1		11
Lionacleit	CNES	14	19	23	29		6	16	1		108
Lionel,Ness	CNES	8	7								15
Lochaber	THC		9		5			1			15
Mallaig	THC	2	4		2		3	1			12
Nicolson Institute	CNES	27	24	50	41			25	10		177
Oban	A&BC	4		3							7
Paible,	CNES	3	6								9
North Uist											
Perth	P&KC			1	1			1			3
Plockton	THC	9	6	9	8			2	2		36
Portree	THC	29	31	23	28		3	8	5		127
Shawbost	CNES	9	9								18
Stirling :	THC	1	1								2
Wallace											
Tain	THC	4	5	2	3			2	2		18
Tarbert	CNES	10	4	6	8			2	2		32
Tiree	A&BC	3	2		4		1	2			12
Tobermory	A&BC	5	2	3							10
Ullapool	THC	11	2	5	2			5			25
Total		36	247	201	198	191		18	106	29	990

教員構成 (Luchd-Teagaisg/ Teaching Staff)

校長 (Ceannard/ Headteacher): Mrs Donalda McComb

教頭 (Prìomh Thidsear/ Principal Teacher)²⁸ : Mrs Margaret Monk

学年担当教員

小学 1 学年 (Primary 1): Miss Ann Marie Nicholson

小学 1 / 2 学年 (Primary 1/2): Mrs Beverley Darroch

小学 2 / 3 学年 (Primary 2/3): Mrs Sarah MacPhee

Miss Annette MacDonald (教師補)

小学 3 学年 (Primary 3): Mrs Patricia MacLeod

理科/情報とコンピュータ工学進行責任者
(Science/ ICT Co-ordinator)

小学 4 学年 (Primary 4): Miss Anne Marie MacNeil

小学 5 学年 (Primary 5): Miss Katie MacLennan

小学 6 学年 (Primary 6): Mrs Morag Hunter

現代諸言語進行責任者
(Modern Languages Co-ordinator)

小学 7 学年 (Primary 7): Mrs Lena Walker

補助職員 (Ancillary Staff)

事務助手 (Clerical Assistant): Miss Lisa MacNeil

事務助手 (Clerical Assistant): Miss Marion MacLennan

教室助手 (Classroom Assistant): Mrs Margaret McPherson

教室助手 (Classroom Assistant): Mrs Veronica Sweeney

供給援助助手 (Resource Assistant): Mrs Toni Bonner

用務員 (管理人) (Janitor): Mr Murdo Campbell

音楽講師 (Music Tutors) バグパイプ演奏 (Piping): Mr Peter MacInnes

Clarsach : Mr Iain Hood

賛美歌練習 (Hymn Practice):

Mr Leonard Aldebert

2 4 . 授業の実施形態及びカリキュラムと科目

授業の実施形態

まず、平常授業の実施形態は、月曜日から金曜日まで平常授業が行われ、土曜日及び日曜日は休日である。平日の一日の時間割は次の通りで

ある。

平日の時間割 (Uairean na Sgoile/ School Hours)

開校時間：	9：00 a.m.
午前中の休み時間：	P 1 ~ P 3 10：20 ~ 10：35 a.m.
	P 4 ~ P 7 10：45 ~ 11：00 a.m.
昼食時間：	12：10 ~ 1：00 p.m.
解散下校：	3：00 p.m.

ただし、小学1学年の生徒は、9月の週末を過ぎるまでは、午前中9：00 a.m.から12：10 p.m.までの出席のみとする。また、“小学生遊戯ケア (Primary Playcare)” という組織が小学生の下校後のお世話を実施していて、このサービスについてのさらに詳しい情報を知らせる連絡先が示されている。

年間の定例行事による休日及び祭日などについては、次の通りで、かなりの休日が盛り込まれている。

2005 - 2006年度の学校の休日一覧 (Laithean Saora 2005-2006/ School Holiday Dates 2005-2006)

クリスマス / 新年休暇	2004 .12 23 ~ 2005 .1 5
学期中間休暇	2005 2 .14 ~ 15
勤務中授業休暇	2005 2 .16
イースター週末休暇	2005 5 25 ~ 28
春期休暇	2005 4 4 ~ 15
勤務中授業休暇	2005 4 29
メー・デー	2005 5 2
五月週末休暇	2005 5 27 ~ 30
夏季休暇開始 (閉校)	2005 6 30
授業開始 (生徒復校)	2005 8 .18
9月週末休暇	2005 9 23 ~ 26
10月休暇	2005 .10 .17 ~ 21
勤務中授業休暇	2005 .10 24
クリスマス / 新年休暇	2005 .12 23 ~ 2006 .1 8

実に多くの休暇があるものだ。クリスマス / 新年の休暇 (2004年度は

14日間、2005年度は17日間）春期休暇（12日間）夏季休暇（1ヶ月と17日間）に加えて、特に十月休暇などは、10月17日が月曜日、21日が金曜日であるから、次の月曜日の勤務中授業休暇を入れると、じつに、10月15日の土曜日から24日まで10日間の長期休暇期間となる。

この小学校に入学を希望する保護者と児童は、毎年12月に学校主催で行われる“オープン・デー（Open Day）”に参加して、この学校の概要、ゲール語による教育および児童たちが参加可能な様々な行事や活動についてのガイダンスを受けるか、1月の初めに地元紙や全国紙に広告が掲載されるのでそれを読んで、応募することになる。その手順としては、この小学校は特に生徒の通学範囲を設けてはいないので、基本的に通学できる範囲であればどこからでも応募できるのだが、まず保護者が各自、自分の地元の小学校に児童を入学させねばならない。そのうえで、すべての学校で入手可能な“配属変更願い（Placing Request）”に必要事項を記入してグラスゴーの市議会（Glasgow City Council）の教育課（Education Department）に提出する。それが当局によって検討され、その結果が3月あるいは4月中に親元及び学校に通知され、手続きが完了となる。

カリキュラムと科目

基本的に、“スコットランド教育局の指導要領5-14（The Scottish Office Education Department 5-14 Guideline）”に則してカリキュラムが組まれ、言語、算数、環境の研究、表現の芸術、宗教及び道徳教育、健康教育、人格と社会化の養成、現代言語（ドイツ語）及び情報・コンピュータ工学などの科目が各学年の必要と能力に応じてバランスよく配列・提供されている。ゲール語教育に関連しそうな各科目の具体的内容と学年に応じた提供方式を次に示す。

（1）「言語（国語）（Cànan/ Language）ゲール語・英語」：「ゲール語5-14文書」によると、「各小学校は、小学7学年までに、あらゆる段階において、生徒達の能力が、ゲール語と英語共にほぼ同じ段階にまで達することを目指すべきである。」とある。この目標を達成させるために、生徒達は最初の2年半は、イメージョン・プログラムに参加する。つまり、P1、P2及びP3の前半まではゲール語だけで授業を受けることになるのである。このねらいは、ゲール語を話さない家庭で育った子供達にはゲール語の基本的な言語能力を身に付けさせることであり、

また家庭でゲール語を話して育った子供達には、ゲール語の発話能力のさらなる強化をはかることである。子供達がゲール語能力、すなわち「読み・書き・聴く・話す」各能力がレベルAに達した段階で、英語の「読み」と「書く」授業が徐々に導入されていく。この学校で、P1からP3までに、P1/2及びP2/3の中間段階が設置されているのはそこに理由がある。つまり、家庭でゲール語に接していなかった、ゲール語初習の生徒達のための配慮がここにあったのだ。

(2)「読解 (Leughadh/ Reading)」: 生徒の読解能力を養成するために、教師は様々な教授法や活動を用いているようだ。低学年から中学年の段階では主に *Storyworld* という教科書を用いた読解教授法が採用されている。この教科書には『ワークブック』と『ワークシート』が用意されていて、読解の可能性をさらに広げたり、読んだ内容についての感想や意見交換など、討論する能力や口頭による表現能力を向上させるための機会をできるだけ多く取れるように配慮されている。また、小学2学年の段階になると、“分担読解 (shared reading)”も導入され、生徒一人一人に積極的な読解作業を促したり、語彙力の拡大を図ったりするのに役立っているという。

英語が導入されるのは、通常は小学3学年の段階だが、子供達がゲール語の読解と作文能力のレベルが十分な段階にまで達して初めて導入される。その能力を達成できる時期は生徒によってまちまちなので、先ほど「言語 (国語) (Cànan/ Language) ゲール語・英語」の授業の解説でも指摘したように、この学校では、P1からP3までに、P1/2及びP2/3の中間段階を設置することによって、生徒の多様な能力あるいは達成度に応じた対応を試みているのである。さらに、“後押し発進読解教授法 (“Jumpstart” Reading Scheme)”という、一連の読本とそれをサポートする補助教材からなる指導法も採用しており、この段階で英語の読解を始める子供の多様な能力に適した各種豊富な教材が用意されている。また、興味のレベルも年齢によってかなり差があり、このような多様で豊富な教材が子供の英語読解能力を飛躍的に伸ばす効果があるようだ。

そして、“後押し発進読解教授法 (“Jumpstart” Reading Scheme)”で好スタートを切った生徒達は、次の段階として“空飛ぶレーサー読解教授法 (“Skyracer” Scheme)”が用意されていて、かなり高度なフィク

ションやノン・フィクションの教材が豊富に含まれ、これらにも挑戦できるようにになっている。

高学年になると、ゲール語の各種小説が教材として導入される。もちろんその文体や内容のレベルは多様性に富み、ゲール語の達者な生徒にも、学習途上にある生徒にも柔軟に対応できるようにグレード分けされている。

(3)「作文 (Sgriobhadh/ Writing)」: 文章を書いて自分自身を表現する機会をできるだけ多く与えるのがこの科目の趣旨である。校長先生は「コミュニケーションを成功させるためには、子供は書き手の身になって読み、読み手の身になって書くことが必要だ」ということを強調された。また、作文の基本原則は子供の図画・絵画の能力を伸ばし、それがひいては口頭でのゲール語能力を伸ばすことにつながるとも指摘された。

具体的方策としては、“新たな水平線 (New Horizons) プログラム” という綿密に練られた作文指導法がある。これには個人的体験の作文から、創作作文、さらには実用的な作文に至るまで広範な作文指導が含まれており、生徒はじっくり時間をかけてこれらの作文作業を行うことが許されている。これにより、生徒達は書き手としての十分な動機付けが与えられ、例えば先生によるモデルの作文例、即ちブレインストーミング、策案、起草及び編集の手順などが示された実例を参考にし、様々な方法を通して、文章を書く技術と様々な文体を身につけてゆく。どのクラスにも、“作文の壁 (Writing Wall)” という掲示板のコーナーがあって、典型的な幾つかの作文のタイプのチェックリストと生徒の作品の実例が掲示されている。

ゲール語のつづりを学習するには *Abair Fuaim* 及び *Fuaimnich E!* という教科書が、また、英語のつづりを学習するには“Nelson Spelling 教授法”が、さらに文字の構成と手書きの学習には“Nelson Handwriting 教授法”が使われている。

(4)「会話と聴解 (Labhairt agus Eisteachd/ Talking and Listening)」: この学校全体の教育の基本方針はゲール語教育にあるので、学校の校舎内及びグラウンドにいるあらゆる子供も大人もゲール語を使つてのコミュニケーションが望ましいとされている。したがって、生徒達はこの「会話と聴解 (Labhairt agus Eisteachd/ Talking and Listening)」の授業内

だけでゲール語の会話や聴解の訓練に参加しているというわけではなく、授業以外の学校行事での舞台の上とか様々な校内での集会などでもゲール語の音声を聞いたり話したりする豊富な機会を持つことになる。この授業ではラジオ、テレビ及び ITC (情報とコンピュータ技術) の電子視聴覚機器などの各種プログラムを用いて、「話す」能力と「聞き取る」能力の強化を図るとともに、聴解力と聴き取った内容及び語彙の記憶力を評価・査定するためにこの科目特別の「聴解力練習問題」なども用いている。

(5) 「現代言語(外国語)- ドイツ語(Modern Language-German)」: 小学6学年担任のハンター先生 (Mrs Hunter) が6学年及び7学年の生徒を対象に、様々な教授法とゲームなどを駆使して、ドイツ語の会話能力養成の指導を行っている。小学6年の生徒には45分間、小学7年生の生徒には1時間の授業を実施している。したがって、この小学生達が卒業して中学校に進学する際には、英語とゲール語のバイリンガルになっていると同時に、第三外国語についての基礎的素養を身に付けていることにもなる。

(6) 算数 (Matamataics/ Mathematics):(省略)

ここまでが主幹教科科目であり、各小学校の学業成績が当局に報告される。本小学校の学業成績については次コーナーで紹介することにして、その他の教科科目の名称のみを列挙し、語学教育に関連のありそうな部分のみについて報告・検討を加えることにし、次の「成績評価」と「学業成績」の話題に移る。

(7) 「環境研究 (Eòlas Arainneachd/ Environmental Studies)」

(8) 「表現芸術 (Na h-Ealain/ Expressive Arts)」

i) 「音楽 (Ceòl/ Music)」

ii) 「演劇 (Drama)」: この科目で養育される技術や能力は一連の “the 5-14 Drama Pack” にしたがって行われるのだが、一方では、ゲール語運用の表現手段としての側面もあり、その意味で語学教育と密接に関連している。生徒達が年に一度のドラマフェスティバル、Ceilidhs、Mods などに参加して、公の前でこのような言語能力を演ずる機会をたくさん持てるということは、一種の「ドラマによる言語学習」であり、ゲール語の口語的運用の習得に大きな効果をもたらすであろう。

(9)「体育教育 (Foghlam Corporra/ Physical Education)」

(10)「情報とコンピュータ技術 (Teicneòlas Fiosrachaidh agus Conaltradh/ Information and Computer Technology)」

(11)「家庭学習 (Obair Dachaigh/ Homework)」教科科目に則して、重要な学習とみなされているのが「家庭学習 (Obair Dachaigh/ Homework)」つまり宿題である。課される宿題の量と時間は児童の学年別能力や個人的な必要に応じて様々であり、小学1学年及び2学年の場合は、「読み」、「書き」あるいは「数」に関する課題が出されるが、いずれも15分を超えないものとされている。小学3学年以上の場合、ゲール語あるいは英語の読解/作文課題、算数(計算力)の強化、つづりの練習、及び環境研究のための個人的調査などが宿題として課される。P3～P7すべての生徒が「宿題日誌 (a homework diary)」を保持し、その日あるいはその週の課題を記録することになっており、親達がそれをチェックし、宿題を終えたらそれにサインしなければならない。各学年の宿題にかかるべき時間の大きな指針は、P1～3は10～15分間、P4～5は25分間、P6～7は45分間とされ、通常は月曜日から木曜日までが宿題の課される曜日である。宿題については各家庭内での作業になるので、その管理は各家庭の保護者ということになり、当然のことながら学校側は保護者側に、各児童に質のよい作業の達成を励まし、終了したら必ず確かめて署名をするよう協力を呼びかけている。決して保護者が生徒に代わって宿題をやらないこと、又宿題がうまく実行できない場合にはその旨を日誌や簡単なメモを通して担任に伝えることなどの指示も明確に保護者側に示されている。

特に初期の段階では、ゲール語話者でない保護者達のために、『宿題言語ブックレット (Homework Language Booklet)』なるものを配布して、児童に課されるゲール語による宿題の指示文の意味の理解に役立てたり、そのような保護者達が児童の宿題を間接的にサポートするために、『ゲール語 - 英語辞典 (a Gaelic-English Dictionary)』の購入なども奨励している。また、学校側が「保護者間援助ネットワーク (a parent help-line)」を組織し、ゲール語話者でない保護者達が宿題についての様々な問題を解決できるように、ゲール語を自由に操れるゲール語話者の保護者たちにコンタクトできるよう配慮をしている。

(12) その他の(教科科目以外の)教育

i) 「人格及び社会性の育成 (Leasachadh Pearsanta agus Soisealta / Personal and Social Development)」: 『ハンドブック2005 - 2006』によれば、「子どもは我が小学校内全体に暖かくて親愛のこもったケルト民族を特徴付ける気風 (雰囲気) 作りに配慮しており、子供達に、自分の必要を満たすだけではなく、ほかの生徒が必要としていることにも気づかせるような指導を心がけている。そして、すべての生徒達がクラスでも運動場でも快適でいられるように、あらゆる状況において援助と指導の手を差し伸べるよう心がけている」という。具体的には、例えば小学1年生 (P1) には“お父さん (Buddy)” と称する小学6～7年生の年長者があてがわれ、学校生活にスムーズに順応できるよう手助けさせており、授業間の休み時間にはいつでも困ったことがあれば相談に応じてくれるシステムができています。また、「子どもはすべての生徒が自分のして欲しいこと、自分の関心のあること、そして自分の意見をしっかりと表現できるようになっていただきたいし、学校全体がいわば家族であり、その大切な一員であることを生徒一人一人が有意義に感じて欲しいと願っている」とも述べており、その意味でこの「人格及び社会性の育成 (Leasachadh Pearsanta agus Soisealta / Personal and Social Development)」略して P.S.D. は、この小学校のカリキュラム全体を通し不可欠なものといえる。このような学習プログラムが生徒一人一人の努力とその学業成績を適切に評価してやることにより、その結果として生徒達それぞれが自尊心と自信を身に付けていくことにもつながる。そのため具体的に試みとして、この学校では、毎週の時間割の中に「サークル・タイム (Circle Time)」を盛り込み、人との討議や付き合い方の技術の養成をはかってきた。この試みは、特に、“弱いものいじめ (bullying)” や、“行儀作法 (behaviour)” 等、生徒にとってやや難しい問題に取り組む際に極めて有効な自己表現の手段として生きているようだ。

また、“今週の優秀生徒 (Pupil of the Week)”、“優秀ライン (The Best Line)”、“Cuach na Gàidhilig”、“出席優良クラス (The Best Class Attendance)”などを全校に発表・掲示する“優良達成板 (Good Work Wall)”を設けているし、クラスごとにも、ステッカーや図表を掲示して、良好な学業評価について様々な奨励手段をこうじている。親切な行動、行儀作法のほかにも際立った努力や学業を達成した生徒に対しては、校

長賞 (Head Teacher's Award) ”が授与され、全校レベルで表彰されることになっている。

ii) 「生徒会 (Pupil Council)」: 生徒会を設け、生徒達にもこの小学校の運営方法に対し発言権を与えており、生徒達がこの学校を改善するための一助となりうるための機会を設けている。例えば、生徒達が自主的に運動場の味気ない壁に壁画を塗るための募金運動を行うというプロジェクトが実現したし、また学校全体がユニフォームから開放される “Non-uniform Day” が企画され、ファッション・ショウが行われ、賞を獲得したデザインが運動場の壁画の題材に採用された。この壁画は現在も運動場の背後に存在している。

iii) 「宗教と道徳教育 (Foghlam Creideamh agus Moraltachd/ Religious and Moral Education)」: この小学校の生徒達は、様々な宗派の家庭で育てられており (multi-denominational) 学校側としては、このように様々な宗教上の教義や姿勢を反映した校風 (ethos) をつくるように努力している。この授業では、世界の3つの主な宗教; 即ち、キリスト教、イスラム教およびユダヤ教、に基づいて行われている。この科目は、宗教上の教義・教訓ではないので、他のすべての科目と同様に学習されるべきものであり、子供達には、自分の信仰する宗教に誇りを持つと同時に、それぞれ信仰する立場の違いを認め、他の宗教に対して敬意と寛容の精神を持つように教育される。授業で扱われる個々の話題を自ら考え模索する (Personal Search) 際に、生徒達は自分たち独自の世界観を尊重することが許されている。

この各宗教教育の間で最も、そして決定的に異なる点はその礼拝の方法であるが、この小学校では毎年、収穫祭 (感謝祭) (Harvest)、クリスマス (Christmas) 及び復活祭 (Easter) に、キリスト教による礼拝式を行う。ただし、すべての生徒は信者としてあるいはオブザーバーとしてこの式典への参加を歓迎されており、もちろん、その両親・保護者、家族及びその友人達の参加も歓迎されている。

また、毎週、教師によって招集される低学年 (Primary 1~3) あるいは高学年 (Primary 4~7) の集会、あるいは必要に応じて、校長先生によって招集される全校集会が開かれる。ここでは、様々な宗教、例えばキリスト教、イスラム教及びユダヤ教など、の諸問題; それぞれの年中行事、例えば感謝祭、クリスマス及び復活祭など; さらに市民権・公民

権に関わる諸問題など、様々なことが話題となる。この集会はすべてのクラスで少なくとも学期に1回は開かれることになっており、それにはすべての生徒が参加して意見を述べることができる。また、当校のチャプレンである、D.M.MacInnes 牧師が常時集会に参加し、必要に応じ、助言をしてくれる。

保護者がこの種の集会に子供を参加させたくなければ、子供の参加を回避させる権利もあり、その場合には、大人の監督の元にしかるべき学業が責任もって施されることになる。特に、少数派民族の宗教団体に属する保護者達が、自分の子供達とともにその宗派で認められた宗教行事に参加するために、子供が学校を欠席することを認めて欲しいと願い出ることもありうる。その場合、申し出についての詳しい説明を書いた書類を提出すればそれが考慮されて、的確な申し出であることが分かれば、1つの学期に3回までは認められて、生徒は認可欠席者（authorised absentee）として出席簿に記録されることになっている。

一方、子供にローマカトリック教会の信徒としての準備をさせたい親達は、しかるべき行動が取れるように、つまり決められた時に授業から抜けられるように、学校当局にその旨を知らせておかなばならない。子供が正餐式のための準備に向け一連の秘蹟（洗礼、堅信、静態、など）の儀式が、新たな手順に従って、しかるべき時期に執り行われることになる：つまり、小学第3学年（P3）の終わりにThe Sacrament of Reconciliationの儀式、小学第4学年（P4）の初めに堅信礼（Confirmation）そして小学第4学年（P4）の終わりに第1回目の正餐式（First Communion）などがある。又、両親達は自分の子供達が教区の正餐式のためのプログラムに加わることができるように、地元の教区の聖職者にその旨を知らせねばならない。

25. 学業成果と出席率

成績評価

あらゆるクラスの、そしてすべての生徒の学業の進展状況が継続的に評価される。したがって、当然のことながら、担任の教師は、担当の生徒個人及びグループ別の、語学および算数の学習の記録や、各生徒が抱えている学習上の問題点の記録などをすべて保管・管理している。また、生徒達は普段の話し方、書き方そして学校生活の様子なども評価される。

例えば、「環境の研究 (Eòlas Arainneachd/ Environmental Studies)」プログラムは、この授業に参加することによりまさに語学力や各種知識の育成が大いに期待されるものであり、教師はそこを普段からの言葉での対応や“テスト(tick sheet)”や“学業記録 (worksheet)”などのチェックをし、評価する。また、全生徒の学業の達成状況を総合的に評価するため、読解・作文・算数について国内統一テスト(National Tests)を実施しており、この結果については後で具体的に、詳しく報告する。

新学期の初めに、教員が非公式な“父母会の夕べ (“Meet the Teacher” Night)”を招集し、ここで親達は自分の子供を担当する新しい先生に対面したり、教員はこの先1年間の教育の概要を説明したりする。また、年間を通して2回ほど“保護者面談 (Parents' Evenings/ Afternoons)”が実施され、保護者は担任の先生に公式に面談する機会を持つが、基本的に、いつでも面会の予約を取り、自分の子供の学業の状況について面談することができるようになっている。

学業成績

すでに述べたように、全生徒の学業の達成状況を総合的に評価するため、“読解・作文・算数についての国内統一テスト(National Testing in Reading, Writing and Mathematics)”を実施しており、その成績についての調査結果を次に報告する。

生徒が言語及び算数についての成績が一定レベルに達すると、²⁹⁾この“国内統一テスト”を受験する。この統一テストに関する評価および達成基準として、次のような段階的レベルが設けられている。

- レベル A : ほとんどすべての生徒が小学1～3学年のコースのうちに達成できなければならない。
- レベル B : 小学3学年、あるいはそれ以前のいくらかの生徒が、そして小学4学年の生徒の大部分は確実に、達成できていなければならない。
- レベル C : 小学4～6学年のコースの大部分の生徒が達成できなければならない。
- レベル D : 小学5～6学年、あるいはそれ以前のいくらかの生徒が、そして小学7年の生徒の大部分は確実に、達成できていなければならない。

レベル E：小学7学年～中学1学年のいくらかの生徒が、そして
 中学2学年の生徒の大部分は確実に、達成できてい
 なければならない。

この小学校の生徒は、受験に的確とみなされた³⁰⁾すべてのレベルの、
 “ゲール語による読解、作文及び算数”の試験を受験することになって
 いる。また、それぞれの生徒は、この小学校を卒業する前に、通常は第
 7学年に、“英語の読解、作文”のテストも受験することになっている。
 「表A」は、2003年度及び2004年度の、この小学校、グラスゴー市全体
 及びスコットランド全体の科目別成績を比較したものである。

表A 【Attainment Levels for Glasgow Gaelic Primary School】

		《前回(2003.6)の 試験の成績% ³¹⁾ 》	《今回(2004.6)の 試験の成績%》
ゲール語読解	当校	81.1	82.6
	市全体	77.7	77.6
	国全体	81.0	81.4
ゲール語作文	当校	86.9	81.3
	市全体	67.9	69.2
	国全体	72.5	73.5
算数	当校	92.8	88.0
	市全体	77.4	77.5
	国全体	80.0	80.1

《小学第7学年を対象にした“英語の読解、作文”の国内統一テストの成績》

読解	レベル C : 6.6	作文	レベル C : 40.0
	レベル D : 93.3		レベル D : 60.0

(-BUNSGOIL GHÀIDHLIG GHLASCHU LEABHAR FIOSRACHAIDH(GLASGOW GAELIC SCHOOL HANDBOOK 2005-2006, p.18-)

この表で分かる通り、この小学校の成績は、グラスゴー市全体から見ても、又スコットランド全体から見ても、群を抜いている。2003年度と比較して2004年度は、ゲール語の読解を除いて、全体的に、やや成績が下がっているものの、すべての科目で国全体レベルより上回っているし、グラスゴー市の平均よりもはるかに良い成績である。ただし、2003年度と比較し、2004年度においては、グラスゴー市及び国全体の成績がわず
 かではあるが、上昇しているのに対し、当校の成績が全体的にやや下降

しているのが気にかかる。

また、当校の成績のもうひとつの特色は、ゲール語の作文と算数の成績が傑出している点である。このあたりが、当校の特色ある教育の効果の表れと言えなくもない。例えば、ゲール語の作文の成績は、2003年度は、グラスゴー市の平均である67.9をはるかに超え（19.0の差）、86.9であり、2004年度に成績は下降したものの、グラスゴー市の平均69.2に対し、81.3であり、12.1の差をつけている。国全体の平均と比較しても、両年平均11.01の差をつけている。この小学校の「作文（Sgriobhadh/Writing）」について校長先生自身が指摘されている「コミュニケーションを成功させるためには、子供は書き手の身になって読み、読み手の身になって書くことが必要だ（p.125 参照）」とか、「作文の基本原則は子供の図画・絵画の能力を伸ばし、それがひいては口頭でのゲール語能力を伸ばすことにつながる（p.125 参照）」などの授業方針や、“新たな水平線（New Horizons）プログラム”や、“作文の壁（Writing Wall）”及び *Abair Fuaim, Fuaimnich E!* などの教科書（p.125参照）の有効な活用を含めて、具体的かつ実践の方策が効果をあらわしているといわざるを得ない。その意味からして、算数と同様に作文の成績が前年に比べかなり下降している点（2003年度の86.9に比べ、2004年度には81.3と5.6ほど下落している）が気になるのであり、ここに何か新たな問題点が潜んでいるのかもしれない。³²⁾

出席率

この学校では、生徒は毎日きちんと出席することが極めて重要であることを再三強調している。当然のことであるが、不完全な出席は子供の学習を中断させることになるし、教える側が提示する重要なポイントを、生徒自身が聞き逃すことになりかねないからである。特に、第2言語の学習は練習と口頭による運用活動を定期的に繰り返すことが必要であるから、なおさら間断のない出席が大切になる。

1980年の教育法（条例）(Education Act) の第30項では、就学年齢にある子供の親に、子供達が休むことなく学校に出席することを保証する義務を課しており、出席状況が毎日午前と午後2回記録されねばならないことになっている。また、その後（1993年）の修正条項7（Regulation 7 of The Education (School and Placing Information) (Scotland) Amendment, etc Regulations 1993）により、欠席の扱いも、学校当局によって認可さ

れた場合には“認可欠席(authorised)”、保護者からの何の説明もない(無断欠席)あるいは、一時的な学校からの停学などの場合には“非認可欠席(unauthorised)”として記録されることになっている。したがって、当校では生徒が当分の間欠席をせねばならないときには、その保護者が手紙または電話で学校にその旨を知らさねばならないことと、生徒が学校に復帰する際には、生徒に欠席の理由を裏付けるメモを持たせることを取り決めている。

子供の教育を中断することになると同時に学習時間そのものが減少することになるのであるから、学期中の家族休暇は極力避けるべきであるが、やむを得ない場合はあらかじめ休暇の期日を手紙で学校に連絡すること、しかもそれまでの出席状況が望ましかった場合にのみ認可欠席扱いとなる。親類への訪問で生徒の欠席期間が延びるむねの許可を両親が願い出た場合には、とくに生徒に宿題は課さないが、その生徒は欠席期間中の学業の遅れを学校または家庭で補てんすることが望まれる。両親または保護者から何ら説明がない場合には認可欠席にはならない。

生徒の出席状況が悪いままだと学校の出席担当係に報告される。そして学校当局にはその生徒の両親に文書を送ったり、面接をしたり、あるいは場合によっては訴追したりする権利、又その生徒を生徒聴聞会の報告官に委ねる権利を有する。

要するに、当学校では生徒に100%の出席を強力に奨励しており、出席率の最良クラスや最良の生徒をすべての生徒が見れる場所に掲示し、定期的に表彰までしている。さらにグラスゴー市議会でも出席率の優良な学校にはその旨の認定証を授与し、公共の場所に掲示さえしている。

さて、この小学校の具体的な出席率を調べてみると、かなり優良であることが分かる。「表 B」は、この学校の出席率・欠席率(認可欠席および非認可欠席)を学年別に、グラスゴー市全体及びスコットランド全土の小学校の平均値と比較したものである。各学年ごとにすべての生徒が出席すべき総時間数に対する欠席率が計算され百分率で示されている。出席は午前と午後2回とられるので、学年によって出席数は異なる。

表 B :

2003 / 04年度の当校の出席・欠席状況

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P1-7
Total Number of Possible Attendances (Pupil Half Days)	13,208	10,208	10,928	7,442	7,980	4,940	5,696	60,402
Percentage Authorised Absences	3.8	4.4	3.1	3.9	2.3	5.9	3.4	3.7
Percentage Unauthorised Absences	0.0	0.0	0.1	0.5	0.1	0.2	0.1	0.1

2003 / 04年度のグラスゴー市全体の出席・欠席状況

	P1	P2	P3	P4	P5	
Total Number of Possible Attendances (Pupil Half Days)	2,038,031	2,238,508	2,273,511	2,267,727	2,275,293	
Percentage Authorised Absences		6.4	6.2	6.0	5.7	5.9
Percentage Unauthorised Absences		0.7	0.6	0.7	0.7	0.6

	P6	P7	P1-7	
Total Number of Possible Attendances (Pupil Half Days)	2,346,530	2,359,917	15,799,517	
Percentage Authorised Absences		5.9	6.0	6.0
Percentage Unauthorised Absences		0.7	0.7	0.7

2003 / 04年度のスコットランド全体の出席・欠席状況

	P1	P2	P3	P4	
Total Number of Possible Attendances (Pupil Half Days)	20,374,990	21,119,901	21,205,662	21,587,560	
Percentage Authorised Absences		4.5	4.2	3.9	3.8
Percentage Unauthorised Absences		0.7	0.7	0.7	0.7

	P5	P6	P7	P1-7
Total Number of Possible Attendances (Pupil Half Days)	21,957,184	22,413,197	22,838,611	151,497,105

Possible Attendances (Pupil Half Days)				
Percentage Authorised	3.8	3.9	4.1	4.0
Absences				
Percentage Unauthorised	0.7	0.7	0.7	0.7
Absences				

(-BUNSGOIL GHÀIDHLIG GHLASCHU LEABHAR FIOSRACHAIDH(GLASGOW GAELIC SCHOOL HANDBOOK 2005-2006, p.32-33-)

まず、学年を通じての平均欠席率（認可欠席及び非認可欠席）はスコットランド全土では、認可欠席が4.0%、非認可欠席が0.7%であるのに対し、グラスゴー市全体では認可欠席はこれより2.0%も高い6.0%である（非認可欠席は0.7%と同率）。これは、前述の“読解・作文・算数”についての国内統一テスト(National Testing in Reading, Writing and Mathematics)”の成績が、ゲール語読解・作文・算数ともに一貫して、グラスゴー市の平均の成績がスコットランド全土の平均よりも大きく下回っていることとあいまって、あまり好ましい傾向ではない。ところが、にもかかわらずこの小学校での、学年を通じての平均欠席率は、認可欠席が3.7%、非認可欠席が0.1%と、グラスゴー市の平均をそれぞれ2.3%及び0.6%も下回っており、しかもスコットランド全土の平均よりも低いのである。

さらに以下に示すように、2002 / 3年度及び2003 / 4年度における、生徒一人当たりの半日欠席数の平均値をグラスゴー市全体及びスコットランド全体と比較してみても、この学校の生徒の欠席率の低さが際立っている。

2002 / 3年度及び2003 / 4年度の半日欠席状況

	Absence recorded(2002/3) Average number of 1/2days absence per pupil	Absence recorded(2003/4) Average number of 1/2days absence per pupil
School (当校)	14.8	14.7
Education Authority (グラスゴー市全体)	27.2	25.6
National (スコットランド全体)	19.4	18.0

(-BUNSGOIL GHÀIDHLIG GHLASCHU LEABHAR FIOSRACHAIDH(GLASGOW GAELIC SCHOOL HANDBOOK 2005-2006, p. 32-)

vi) 課外活動

学校と地域との交流

スコットランドにおける最初のゲーリック・スクールとして、本校は地元 Woodlands 地区のコミュニティーにおいても、又グラスゴー市全体から見ても重要な役割を果たしているといえる。例えば、この小学校の向かいにある公園 (The Millennium Park) の開発については地元の Woodlands Community Trust とともにその実現に協力してきたし、「母語の日 (Mother Language Day)」には地元のバングラディッシュのコミュニティーと協力して、お互いの文化理解を深めるため、舞踊、音楽、歌及び詩などを紹介し合い、お互いの文化の比較やお互いの伝統を体験している。また、ケルト文化の行事、Celtic Connections の期間には、本校は生徒によるコンサートを開き、著名なゲール音楽の専門家と共演して参加した聴衆を楽しませているし、さらに伝統芸能振興のために、The “Fèisean Nan Gàidheal” organisation や the Gaelic Arts Development Officer などの協力を得て、シンティー、ステップダンス、ストーリー・テリング (講談) 及び歌唱の指導者を定期的に学校に招き、ワークショップを展開している。なお、本校の施設は週末になると本校及び地元の人々によるさまざまなクラブや各種団体に解放され、有効に活用されている。このような地元社会に根ざした本校の語学教育は、文化抜きの機能主義一辺倒の語学教育、お互いの異文化理解を忘れた語学教育に対し警鐘を鳴らしているといえる。

現在、本校には Campbell 氏が組織するサッカー・クラブ、“NOPEs” 基金を通して組織されている「初歩シンティー (“First Shinty”)」及びスコットランド・カントリーダンスのクラブがある。さらに、この「初歩シンティー (“First Shinty”)」の発展版ともいべき「アウトドア・シンティー」のクラブが生徒の父親達によって組織されていて、毎週月曜日の夜、Bellahouston Park に集まって練習している。校長先生の話では、中にはかなり遠くから参集せねばならない家庭もあるのに、これらのクラブへの出席率は極めて良いとのことだった。また、The Sradagan Youth Club というクラブが、毎週木曜日の夜、親達の「語学クラス (“Parent Language” class)」と同じ時間に親子どもも参集し、活動している。

生徒達が学校の授業の中で得た知識をさらに拡大したり、授業外の場で実践したりするのが課外活動の役割りであるから、当校では課外活動をかなり重視していて、生徒を博物館、スポーツ観戦、各種展示会、コンサート、それに科学、ダンス、ドラマなどのワークショップなどに連れて行くなど、年間を通じてこのような体験学習を実施している。例えば、ラジオやテレビのゲール語番組に出演したり、コンサートで合唱するなど公共の場での実体験を踏んでいるし、昨年度には第7学年（P7）の生徒をGalwayに、第6学年（P6）の生徒をRaasayに派遣し、スコットランドとアイルランドのゲール語の母語話者たちの下での語学研修を実施した。これらの研修を通じて、例えばスペインやウェールズその他の少数言語の問題を抱えた国々との交流によって、少数派言語の振興の輪を広げたいとの極めて壮大な意図があるのだという。

2.6. 卒業後：中学校への進学とゲール語教育

一般に小学校を卒業した段階で、生徒達の年齢は、11歳6ヶ月から12歳6ヶ月までの範囲であるが、通常はさらに先の中学校に進学することになる。中学校の新学期が始まる期日に先立って、その前年の12月までには、どの中学校に進学するのかについての情報が親達に知らされる。本校の生徒の場合、通常はHillpark Secondary School（36 Cairngorm Road, Glasgow G43 2XB）に進学することになる。中学校でのゲール語教育の実態については本稿の扱う範囲を超えているのだが。すでに述べたように、2006年8月に、スコットランドで最初の独自のゲール語による教育（最終的にS1～S6までの全中学校教育）を実施する中学校、“Taobh A’Coille–The New Sgoil Ghàidhlig Ghlaschu”が新たにグラスゴーに誕生するので、それと同時に、Hillpark Secondary Schoolはここに合併吸収されることになっている。それまでの間の移行措置として当面の間この中学校での教育サービスは引き続き行われる。これもすでに指摘したことだが、新設されるThe Woodside Campus（名称はTaobh A’Coille）は、“Pre-5”部門（Pre-5 Section）、小学校部門（Primary Section）及び中学校部門（Secondary Section）の3部門を擁するいわば、「ゲール語教育を柱にした一貫総合学校（The 3～18 Sgoil Ghàidhlig Ghlaschu）」ということになる。

3. まとめ

スコットランドにおける言語事情は、スコットランドの歴史とそれに伴う民族の混交、つまり言語接触の歴史をそのまま反映しているといえる。具体的には、初期のケルト系ピクト人と、5世紀ごろよりアイルランドからスコットランド西部地域に侵入し、ピクト人を吸収しつつ独立王国を形成しながら、しだいに支配を拡大し、11世紀には北東イングランドにまで領土を広げたスコット人、さらに7世紀にノーサンバーランドからスコットランド南東部に侵入し、南西部に拡大していったアングロ・サクソン人と、その後、やはりイングランドからやってきたアングロ・ノルマン系の人々や、8～9世紀に北部スコットランドにやってきたノルウェー人達に加わって、ほぼ現代の人種構成が決まったわけだが、その民族の混交の歴史が、そのまま彼らの話していた言語の接触の歴史に反映されている。

スコットランドの言語史と現代の言語事情を、ゲール語の普及と衰退と復活の歴史という視点から浮き彫りにすることができる。10世紀頃までに、スコットランドの大部分の地域で「スコットランド・ゲール語」が話されていたが、1066年を契機に、宮廷や貴族達が Norman French を使うようになり、次第にゲール語はその優位性を失っていく。と同時に、スコットランド東部及び中央部の大部分で「スコットランド語」にその地位を奪われていき、17世紀までにゲール語使用地域はスコットランド高地地方やヘブリディーズ諸島などに追いやられていく。さらに、17世紀以降の、同君連合・名誉革命・議会合同・ジャコバイトの乱など一連の歴史的イベントや産業革命に伴う政府の政策により、ゲール語は完膚無きまでに打ちのめされる。15世紀後半から18世紀にかけてのスコットランド及び英国国会による英語教育促進政策の波状攻撃が見事に功を奏したというわけである。

ところが、20世紀中ごろまでに衰退の極に達していたゲール語が、1970年代の半ばになってようやく草の派的復興を迎える。いわゆる“ Gaelic Renaissance ” の到来であり、これによってゲール語の復興を目指そうとの気運が高まり、次世代のゲール語話者を育てるために、各地に Gaelic playgroups, Gaelic primary schools, Gaelic Youth Clubs などが設立され、

ゲール語のみならずゲール文化の復興活動が盛んになる。そして、2005年の「ゲール語法 (Gaelic Language Act)」の成立を迎えた。

Glasgow Gaelic Primary School(Bunsgoil Ghàidhlig Ghlaschu)でのゲール語教育は、このような流れの中で生まれ、発展してきた。スコットランドで唯一の独自のカリキュラムに基づき、ゲール語ですべての教育を実施しているこの小学校 (Gaelic Medium School) は、スコットランド中でも注目を浴び、スタッフによる熱心な教育のかいあって優秀な成績を修め、さらに大きく発展しようとしている。ところが、この学校の生徒の60%は英語のモノリンガルであり、残りの40%の生徒はゲール語と英語のバイリンガルの環境にあるという。したがって、この学校の『ハンドブック』は大部分が英語で解説されている。その背後には、保護者の多くが北部出身で、子供や孫達にゲール語を習得し、ゲール文化に愛着と誇りを持つようにとの願いが見え隠れする。

ゲール語教育に見られるスコットランド全体の傾向としては、資料にも見られるように、その分布が、グラスゴー、エディンバラ、スターリングなどの大都市を除けば、おおむね北西に濃く、南西に薄い。これはゲール語話者の分布とほぼ一致している。そして、少ない学校数に多数の生徒を抱えている“都市型”のゲール語学校と、生徒数は少ないが、多数の学校が広範に分布している“地方型”のゲール語学校とに分かれており、ゲール語教育のあり方や形態に違いがある。ゲール語教育の将来を担う保育園や中学校の教育事情についても都市型と地方型に相違が見られる。保育園と園児数の分布は、都市に多く、地方に少ない。特に地方に過疎化の傾向が見られ、将来的には、地方よりも都市においてゲール語話者の増加が見込まれるであろう。また、中学校と生徒数の分布は、小学校に比べて手薄であり、ゲール語教育の現実とその普及の障害になりうるのではないか。特に、グラスゴーでは、保育園と小学校の数と生徒数で他を圧倒し、文字通りスコットランド全土で最もゲール語教育の盛んな地域であるはずなのだが、中学校のゲール語教育となると必ずしも優位に立っていないという現実があった。

本校 Glasgow Gaelic Primary School(Bunsgoil Ghàidhlig Ghlaschu)でのゲール語教育については、かなり充実した教育が実施されていることが、訪問中も、また収集した資料からもひしひしと伝わってきた。特に、1) 学年構成が柔軟で、1年から3年生にかけて2つの中間学年を設け、

各生徒の能力に合わせ柔軟な学年進行を行っている。2) グラスゴー全体から見ても、またスコットランド全体から見ても、この小学校の学業成績と出席率は群を抜いていた。特に、ゲール語の作文と算数の成績が傑出している。この学校独自の各種試み(カリキュラムと科目参照)が反映されていると思われる(ただし、2003年度と比較して2004年度の成績が僅かに下降している)。3) 教科科目以外の教育に細かな配慮が施されており、保護者やゲール語文化の普及に理解のある地域の人々や団体が一体となってゲール語教育を盛り上げている。4) 低学年から高学年に行くにしたがって、生徒数が減少する傾向にあり、ゲール語教育の難しさと問題点を覗かせた。ただし、これはスコットランド全体の傾向でもある。以上が顕著な特色であった。

「ゲール語法」時代を迎え、2006年8月からの新キャンパスでの一貫総合学校でのゲール語教育に大いに期待したい。

【注】

- 1) 正確には、スコットランド・ゲール語はスコットランドのハイランド地方(Scottish Highland)及びアウトター・ヘブリディーズ(Outer Hebrides)を中心とする島嶼地域とそれにカナダ東部の半島にあるノバスコシア州(約1,000人)などで話されている。2001年の国勢調査(Scotland's Census 2001-Gaelic Report)によれば、同年、スコットランドにおいて、92,400人以上の人々が何らかのゲール語運用能力を持っており、そのほぼ半分がEilean Siar, Highlands及びArgyll & Buteの各地域に居住している。このうちの63%、つまり計算上は58,212名がゲール語話者であったと報告されている(ただし、2005年にGeneral Register Office for Scotlandで公開された資料によれば、ゲール語話者数は、1991年には65,978名、2001年には58,652名となっている。したがって、その他のゲール語使用者というのは、ゲール語を読める人、ゲール語を書ける人、ゲール語を聞いて理解できる人などということになる。Registrar General for Scotlandの職にあるDuncan MacNiven氏によれば、1991年の国勢調査と比較して、ゲール語話者の数は7,300人(11%)減少したが、ゲール語を読める人の数は3,200人(7.5%)増加し、ゲール語を書ける人の数は3,100人(10%)増加したとのことであった。また、今回新たに加えられた質問項目によれば、ゲール語を話したり、読んだり、書いたりできないが、ゲール語を聞いて理解することはできるという人が26,700人もいたという。さらに、地域的変化としては、伝統的にゲール語話者の多かったはずのThe Western Isles地区においてゲール語使用が衰退し、その他の地域で増加しており、特にゲール語の話せる5～9歳の子供が430人も増加したと報告されている。

- 2) 2001年の国勢調査によれば、2001年6月30日現在、スコットランドの人口は5,064,200人であり、このうちゲール語話者を58,212人と見積もっても、また58,652人と見積もっても、全体の約1.2%にしかならない。ただし、何らかのゲール語運用能力を持つ人は92,400人以上いるのだから、こちらの比率は1.8%強ということになる。
- 3) 紀元前600年頃（鉄器時代）に、中央ヨーロッパから拡散し、イベリア半島を経て、ブリテン島やアイルランドに渡来したケルト系の一派がスコットランドに至り、紀元前400年から200年間に渡りヘブリディーズ諸島におびただしい数のプロッホ Broch（円形をした頑強な石塚）やダン Dun（砦）を建造した。彼らが紀元前からハイランド一帯に勢力を持ち、ローマ軍に抗戦した勇猛果敢な謎の民族ピクト人であったかどうかは別として、ブリソン語派のケルト語（p-ケルト語）を話すケルト人であったとされている。（武部：1999, 30）
- 4) 厳密には、まず [qu-] が [wh-] へと変化したが、単語によっては [p-] に変化するものもあり、さらにそれらが [f-] へと変化していったと考えられている。
- 5) Fios Feasa*のホームページは <http://www.fiosfeasa.com/>
- 6) 後述するスコットランドの言語名 Scots「スコットランド語」と同名で紛らわしいが、もともと“Scot”は「海賊」を意味する学術用語が日常語になったもので、彼らがアイルランドからブリテン島に移住してきた当初から使っていた用語ではない。R. Mitchison ed. (1997) *Why Scottish History Matters. 2nd ed.* Edinburgh: The Saltire Society. 1頁参照。
- 7) ピクト人は、本来はブリソン人（Brython）あるいはスキト人（Scython）といわれたが、ピクト人と俗称されるようになったのは、彼らの間に、体に色を塗る、あるいは刺青の風習があったため、これに接したローマ人が“pict「色を付けた」人種”と、ラテン語で表現したことに始まるという説がある。ちなみに、この pict は中世英語では pictur であり、現代英語の picture の語源でもある。
- 8) 1745年にチャールズ・エドワード・スチュワートを担ぎ出してスコットランドの独立の夢を追うも、はかなく敗北して以来、高地地方は氾濫分子のたまり場とみなされ、常に日常生活が監視下におかれることになるが、19世紀初めになってこれに追い討ちをかけるように行われたスコットランド高地地方の社会の大改革が「クリアランス」と呼ばれる小作農民の強制立ち退きであった。産業革命の基幹産業、繊維産業を優先する政策が高地地方を狙い撃ちする形となった。収益を優先するための土地利用と偽って、家族づきあいをしてきた小作農を強制的に立ち退かせた。農村の若者を追い出すために雇われた国家公認の人買い（プレス・ギャング）たちは、「従軍すれば高額給料が払われ、復員すれば農場がもらえる」と偽って若者を駆り立てた。（横川：2000, 84-89）
- 9) ゲール語省（Bòrd na Gàidhlig）の主な役割は、ゲール語の使用能力と

理解能力の促進と、ゲール語教育及びゲール文化普及の促進であり、そのための各機関への広報・要請活動や、“Gaelic Language Plan”を企画し実行することにある。

- 10) <http://www.cs.stir.ac.uk/~kjt/general/scots.html> 最初に、“This is an informal guide to the Scots tongue for the benefit of occasional visitors to Scotland. It makes no claims to be authoritative, complete or accurate.”という断り書きが示されている。
- 11) Scots についての更なる情報は www.scots-online.org ('Pittin The Mither Tongue on the Wab!') を参照のこと。
- 12) Lallans とは ‘the Lowlands of Scotland’ を意味するスコットランド語 (Scots) lawlands [la:lər(d)ɹ] の変種で、Scots language あるいは Lowland Scots を指す。Scottish Renaissance の頃に、Robert Burns や Robert Louis Stevenson などによって使われ、日常語から古語表現まで様々なスコットランド語を統合合成させたとの事から、Hugh MacDiarmid により、“synthetic Scots (合成スコットランド語)”などと指摘されたり、“plastic Scots”などと中傷する者もいたようだ。Scots Language Society の雑誌の名称にもなっている。また、北アイルランドでは Ulster Scots のことを Ulster と Lallans を合成させた Ullans という名称を「回顧調文学的文体」を意味するのに用いることもある。
- 13) ただし、歴史的を遡れば、「スコットランド語」で書かれた文献、特に16世紀の詩、戯曲、裁判記録、政府の諸文書、及び19～20世紀の詩、戯曲、小説など文学作品、新約聖書の翻訳などがある。
- 14) エディンバラの Morningside accents に相当するものとして、グラスゴーには Kelvinside accents があり、イングランド英語の RP に相当するようである種の威信をもっているようだ。
- 15) 地元の幾つかの PAP に顔を出したが、滞在先の正面の道路を隔てた真向かいにあった *The Doublet* に最も頻繁に通い、そこで親しくなった資料提供者118名の一部である。ほぼ全員が快く協力してくれ、貴重な資料・コメントをを提供してくれた。
- 16) ちなみに、2001年と1991年の国勢調査の結果を比較すると、スコットランドの3歳以上の住民のうち、i) ゲール語を話せるか、読めるか、書けるかのどれかに相当すると答えた人の数が69,510 (1.4%) [1991]、65,674 (1.3%) [2001] ; ii) 話せると答えた人が65,978 [1991]、58,652 [2001] ; iii) 読めると答えた人が42,159 [1991]、45,320 [2001] ; iv) 書けると答えた人が30,760 [1991]、33,815 [2001] ; v) 聴いて理解できると答えた人が(不明) [1991]、78,402 [2001] であった。-(Scotland's Census 2001, Gaelic Report: 2005. 10. 10)
- 17) 筆者がシェトランド諸島を視察したのは比較的気候の穏やかな9月上旬であったが、それでも、諸島最北のウinst島の北端にある National Reserve の崖の縁をただ一人で暴風雨の中、移動した折には、生命の危険

を感ずる体験をし、この地の気候の厳しさの一端を味わったのであるが、このウンスト島にも、Unst Heritage Center, Unst Boat Haven など各種民族博物館が点在し、かつてはノルウェーの領土であった頃からの海洋・漁業を通じた交流の歴史を示す各種資料が展示されていた。

- 18) 筆者は、幾つかの地元の Pub を渡り歩き、その中でもっとも適切と思われる Pub、*The Doublet* を選定し、頻繁に通って友人を作り、資料収集のための環境作り回数に数週間費やした。そのうち友人が友人を紹介してくれるようになり、最後にはホテル住まいは経済的でないからと、pub の近くに部屋の空いている友人を紹介してくれ、後半 2 ヶ月はそこにお世話になることになった。「そのかわりにお酒を飲みに来い」とのバーテン、Gordon さんの魂胆でもあったのだが、店のお客達を含めて、気軽に何でもこちらの執拗な質問に答えてくれるようになった。
- 19) 1970～80年代に人気番組 *Parliamo Glasgow* で活躍した伝説的なコメディアン Stanley Baxter、現代も活躍中の Rikki Fulton、人気テレビ番組“RABC Nesbitt”シリーズの Gregor Fisher, Tony Roper, Elaine C. Smith, Barbara Rafferty、スコットランド訛りで歌う双子の歌手 Proclaimers など。
- 20) 1469年に、ジェームズ3世がデンマーク・ノルウェー国王クリスティアンの娘マーガレットと結婚し、持参金代わりにオークニー諸島とシェトランド諸島を獲得した。
- 21) Waugh, D. (ed.) (1996) *Shetland's Northern Links*. Lerwick: Scottish Society for Northern Studies. を参照のこと。
- 22) スコットランドの伝統的スポーツの一つで、グランドホッケーにやや似ている。サッカーのように芝生のグラウンドで、クリケットの玉よりも一回り小さいが、羊の皮を張った実に硬いボールを木製のスティックでたたいて、運んだり味方にパスしたりして、最終的に相手のゴールに叩き込めば得点できる。スティックを上から振り下ろしても良い（ここがグランドホッケーと異なる点で、試合中に相当激しいぶつかり合いが生ずる）ので、試合中にスティックが当たって鼻血を出したり怪我をする選手も出たりして、かなり激しいスポーツである。大きな試合になると、テレビで中継されることもある。*The Doublet* でバーテンをしている資料提供者の一人、Craig Ross 君はシンティーの選手で、記念に僕にボールを買ってくれた。
- 23) すでに指摘したように、“The Bunsgoil Ghàidhlig Ghlaschu (Glasgow Gaelic Primary School)”(下線筆者)は2005年6月に正式に閉鎖され、同年8月に“The Sgoil Ghàidhlig Ghlaschu (Glasgow Gaelic School)”(下線筆者)として再開設されたのだから、学校の名称はすでに変更されているはずだが、『ハンドブック』では旧名のままになっている。
- 24) P1とP3の間に、P1/2及びP2/3の2つの中間学年を設け、P1からP3への進学年をスムーズに進行させるための試みがなされていると考えられる。かなり柔軟かつ流動的な対応をしているといえよう。
- 25) 運営定員については、それぞれの学年の生徒の人数とそれぞれの授業の

組み立て方によって多少変化する。

- 26) この一連の資料は、この小学校の校長 (Mrs Donalda McComb) からいただいたものに基づいており、2005年3月2日付で、ストラスクライド大学 (University of Strathclyde) のゲール語学部 (Gaelic Department) による調査結果に、筆者が、地域の人口、面積、Council Area (地方議会区分) の名称、などの諸情報を盛り込み、編成し直したものである。
- 27) Scotland's Census 2001 Gaelic Report(Registrar General for Scotland: 10 Oct. 2005) に基づいて作成したもので、地図上の1~32がスコットランドの各 Council Areas を表し、さらに各地域の3歳以上のゲール語話者のパーセンテージとその分布が図で示されている。
- 28) この役職は、校長の代理を務めたり、教科科目のサポートをしたり、National Testing Staff の開発進行責任者を務めたりするという任務課題を持つ。
- 29) 受験資格を学年指定とせずに、能力のレベル指定としているところが、この学校の好成績につながっているのかもしれない。そのために、小学2年生が実際には、能力別に2つに分割されており、やや変則的かつ柔軟なシステムを採用している。
- 30) 先ほども指摘したように、学年指定の網羅的受験の統一テストではなく、個人が能力別に指定されたレベルの受験となるので、各レベルにあった能力の生徒が効果的に受験し、これが全体的好成績をもたらす要因となっていると思われる。
- 31) この百分率は、正確にはP3, P4, P6及びP7学年に登録した生徒の到達率、あるいは5~14歳レベルの各段階の最低条件を超えたレベルで受験した生徒の到達率を表していると思われる。つまり、成績優秀でさらに先のレベルの試験を受験した生徒の成績が盛り込まれているということであり、このこともこの小学校全体の成績向上につながっているとみてよいだろう。
- 32) ゲール語の作文と算数の成績は、グラスゴー市及び国全体の平均では、作文でグラスゴー市が67.9から69.2へ、国全体で72.5から73.5へ、算数ではグラスゴー市が77.4から77.5へ、国全体では80.0から80.1へと、余り変化は見られないものの、どちらもわずかながら伸びているのであり、この小学校の成績と対照的である。とはいっても、全体から見ると、当校の成績は、国全体及びグラスゴー市全体の平均値よりもはるかに上回っていることに違いはない。

本稿の執筆にあたり Glasgow Gaelic Primary School の校長 Mrs Donalda McComb をはじめとする学校のスタッフ及び the Doublet での資料提供者の皆様のご協力に深く感謝するものである。

【資料提供者一覧】

Barry Selkirk (60歳代、男性、サラリーマン)

Phil (Philip) Petherbridge (50歳代、男性、家屋解体業)
Billy William Pullen (50歳代、男性、左官・タイル職人)
Bobby Lokat McDougall (50歳代、男性、画家)
Chris Brown (50歳代、男性、音楽教師)
Clarke Shearer (40歳代、男性、庭師)
Colon (40歳代、男性、大工)
David Calder (50歳代、男性、大学教師)
Dunnery (60歳代、男性、水道工)
Ewen (Eoshain) MacLeod (50歳代、男性、音響技師)
Graham Norman (40歳代、男性、建築設計士)
Ian Black (60歳代、男性、作家)
Jacqueline Woad (30歳代、女性、大学教師)
Jess Corrigan (50歳代、女性、ラジオ放送局のプロデューサー)
Jim Corrigan (60歳代、男性、建築設計士)
Jimmy Watrick (Jimi Watret)(50歳代、男性、ギター奏者、歌手)
John Duffy (80歳代、男性、元船長、地元の名士)
Lena Fabrizio (40歳代、女性、高校教師)
Liz Irwin (40歳代、女性、看護婦長)
Mary Ann Carrabino (50歳代、女性、建築研究家)
Melanie Shields (40歳代、女性、看護婦長)
Owen Hagan (60歳代、男性、元中学校教師、青少年カウンセラー)
Paul Gavin (40歳代、男性、映画製作照明・カメラマン)
Tom Shields (50歳代、男性、新聞記者、スポーツ・ジャーナリスト)
Tony McGrachan (30歳代、男性、グラスゴー大学院生)

【参考文献】

- Aitken, A.J. (1984) 'Scots and English in Scotland'. In P. Trudgill (ed.), *Language in the British Isles*. Cambridge : CUP, 94-114.
- _____, A.J. (1985) 'Is Scots a Language?' *English Today* 3, 41-5.
- Chirrey, D. (1999) 'Edinburgh: Descriptive Material'. In P. Foulkes and G. Docherty (eds), *Urban Voices. Accent Studies in the British Isles*. London : Arnold, 223-9.
- Corbett, John, J. Derrick McClure and Jane Stuart-Smith (2003) *The Edinburgh Companion to Scots*. Edinburgh : EUP.
- Crystal, D. (1995) *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. Cambridge: CUP
- 東浦義雄 『スコットランド の謎』大修館書店、1988年。
- リチャード・キレーン著 岩井 淳、井藤早織訳 『図説スコットランドの歴史』彩流社、2002年。
- 小林章夫 『スコットランドの聖なる石：ひとつの国が消えたとき』日本放送出

- 版協会、2001年。
- 小牧英之 『スコットランド歴史紀行』 松拍社、2004年。
- Macafee, Caroline (2001) 'Scots: Hauf Empty or Hauf Fu?' In J. M. Kirk and D. P. O Baoil (eds), *Linguistics Politics. Language Policies for Northern Ireland, the Republic of Ireland and Scotland. Belfast Studies in Language, Culture and Politics* 3. Belfast: Clo Ollscoil na Banriona, 159-68.
- MacKinnon, K. (1998) 'Gaelic in Scotland'. In O Corrain and S. MacMathuna(eds), *Minority Languages in Scandinavia, Britain and Ireland. Acta Universitatis Upsaliensis, Studia Celtica Upsaliensia* 3. Uppsala: Almqvist & Wiksell International, 175-97.
- McArthur, T. (1992) (ed.) *The Oxford Companion to the English Language*. Oxford: OUP.
- _____. T. (1998) *The English Languages*. Cambridge: CUP.
- McClure, J. D. (1995) *Scots and its Literature*. VEAW G14. Amsterdam: Benjamins.
- Meurman-Solin, A. (1999) 'Letters as a Source of Data for Reconstructing Early Spoken Scots'. In I. Taavitsainen, G. Melchers and P. Pahta (eds), *Writing in Nonstandard English*. Amsterdam: Benjamins, 305-22.
- ロザリンド・ミチスン編 富田理恵、家入葉子訳 『スコットランド史 - その意義と可能性 - 』 未来社、1998年。
- Miller, J. (1999) 'Scots: a Sociolinguistic Perspective.' In L. Niven and R. Jackson *The Scots Language: Its Place in Education*. Dumfries: Watergaw.
- 森 護 『スコットランド王国史話』 大修館書店、1988年。
- Nancy, Dorian (1981) *Language Death. The Life Cycle of a Scottish Gaelic Dialect*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Romaine, S. (1982) 'The English Language in Scotland'. In R.W. Bailey and M. Gorlah (eds), *English as a World Language*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press, 56-83
- 佐藤猛郎、岩田託子、富田理恵編著 『スコットランド』 河出書房新社、2005年。
- 高橋哲雄 『スコットランド 歴史を歩く』 岩波書店、2004年。
- 武部好伸 『スコットランド「ケルト」紀行：ヘブリディーズ諸島を歩く』 彩流社、1999年。
- Wagh, D. ed. (1996) *Shetland's Northern Links*. Lerwick: Scottish Society for Northern Studies.
- Wells, J. C. (1982) *Accents of English*, Vols - . Cambridge: CUP.
- 横川善正 『スコットランド 石と水の国』 岩波書店、2000年。